

# 箱崎 24

— 箱崎遺跡群第 39・41・44 次調査 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 854 集

2005

福岡市教育委員会



HAKO ZAKI

# 箱崎 24

— 箱崎遺跡群第 39・41・44 次調査 —  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第 854 集



2005

福岡市教育委員会



## 序

福岡市は古くから東アジアとの対外交渉の窓口として発展してきました。このような環境のもとに数多くの埋蔵文化財が残されており、本市ではこの保護と活用に努めているところであります。

本書は東区箱崎における共同住宅建設に伴い実施した埋蔵文化財発掘調査の記録です。調査の結果、当地域の歴史を知るうえで多くの貴重な資料を得ることができました。

本書が埋蔵文化財保護のご理解の一助として、また研究資料として僅かでも役立てば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり古田暢氏（第39次調査）、三愛建物株式会社（第41次調査）、児嶋邦男氏（第44次調査）をはじめ多くの方々のご理解、ご協力を賜りましたことに対し、心より感謝の意を表する次第です。

平成17年3月31日

福岡市教育委員会  
教育長 植木 とみ子

## 例　　言

1. 本書は福岡市教育委員会が東区箱崎において実施した箱崎遺跡第39・41・44次調査の報告書である。
2. 本書で報告する各調査の細目は以下のとおりである。

調査次数	調査番号	遺跡略号
第39次調査	0302	H K Z-39
第41次調査	0343	H K Z-41
第44次調査	0368	H K Z-44

3. 本書に掲載した遺構実測図の作成は中村啓太郎、高木誠、福田匡朗、上田龍児、安藤史郎が行った。
4. 本書に掲載した遺物実測図の作成は中村、上田、今井隆博が行った。
5. 本書に掲載した挿図の製図は林由紀子、今井隆博が行った。
6. 本書に掲載した遺構、遺物写真的撮影は中村が行った。
7. 本書で記述する輸入陶磁器の分類は以下の文献を参考とした。  
太宰府市教育委員会「太宰府寺坊跡XV-陶磁器分類編」(太宰府市の文化財第49集)
8. 本調査に関わる記録、遺物等は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵保管される予定である。
9. 付論として九州大学大学院比較社会文化研究院 中橋孝博教授による出土人骨に関する分析  
及び大規模事業等担当 屋山洋氏による出土獣骨の分析を掲載している。
10. 本書の編集は中村が行った。

## 本文目次

I. 位置と環境 .....	1
1. 位置と環境 .....	1
2. これまでの調査 .....	4
II. 第39次調査 .....	5
1. 調査に至る経過 .....	5
2. 調査体制 .....	5
3. 調査概要 .....	8
4. 調査の記録 .....	10
1) 井戸 .....	10
2) 土坑 .....	16
3) 溝 .....	30
4) その他の遺物 .....	30
5. 小結 .....	30
III. 第41次調査 .....	31
1. 調査に至る経過 .....	31
2. 調査体制 .....	31
3. 調査概要 .....	32
4. 調査の記録 .....	35
1) 井戸 .....	35
2) 土坑 .....	44
3) 溝 .....	47
4) 土壙墓・木棺墓 .....	49
5) その他の遺物 .....	51
5. 小結 .....	54
付論 .....	55
1 箱崎遺跡第41次調査出土の中世人骨 (九州大学大学院比較社会文化学府 岡崎健治・中橋孝博) .....	55
2 箱崎41次調査出土動物遺存体について (文化財部 大規模事業等担当 屋山 洋) .....	59
IV. 第44次調査 .....	61
1. 調査に至る経過 .....	61
2. 調査体制 .....	61
3. 調査概要 .....	63
4. 調査の記録 .....	63
1) 井戸 .....	63
2) 土坑 .....	64
3) その他の遺物 .....	68
5. 小結 .....	68

## 図版目次

- |      |  |  |
|------|--|--|
| 図版1  | (1) 第39次調査北半区全景  | (2) 第39次調査南半区全景  |
| 図版2  | (1) SE-9 (北から)<br>(3) SE-74 (南から)<br>(5) SK-40 (北から)         | (2) SE-50 (北から)<br>(4) SE-92 (北西から)<br>(6) SK-63 (南から)   |
| 図版3  | (1) SK-69 (東から)<br>(3) SK-73 (北から)<br>(5) SK-80・81 (南から)     | (2) SK-70 (北から)<br>(4) SK-76 (東から)<br>(6) SK-99 (東から)    |
| 図版4  | (1) 第41次調査東半区全景  | (2) 第41次調査西半区全景  |
| 図版5  | (1) SE-33 (東から)<br>(3) SE-65 (南から)<br>(5) SE-67 (西から)        | (2) SE-64 (西から)<br>(4) SE-66 (西から)<br>(6) SE-68 (東から)    |
| 図版6  | (1) SE-155 (南から)<br>(3) SE-157・208 (西から)<br>(5) SE-171 (北から) | (2) SE-156 (南から)<br>(4) SE-169 (南から)<br>(6) SE-172 (北から) |
| 図版7  | (1) SK-34 (西から)  | (2) SK-34 (東から)  |
| 図版8  | (1) SK-35 (西から)  | (2) SK-35 (東から)  |
| 図版9  | (1) SK-63 (西から)  | (2) SK-63 (南から)  |
| 図版10 | (1) SK-30 (西から)<br>(3) 調査区東端部 (東から)                          | (2) SK-18 (東から)<br>(4) 調査区北拡張部 (北から)                     |
| 図版11 | (1) 第44次調査西半区第1面   | (2) 第44次調査西半区第2面   |
| 図版12 | (1) 第44次調査東半区第1面   | (2) 第44次調査東半区第2面   |
| 図版13 | (1) SE-33 (西から)<br>(3) SK-1 (西から)<br>(5) SK-73 (東から)         | (2) SE-154 (北から)<br>(4) SK-72 (東から)<br>(6) SK-74 (南から)   |
| 図版14 | (1) 第39次調査出土遺物<br>(3) 第44次調査出土遺物                             | (2) 第41次調査出土遺物   |

## I. 位置と環境

### 1. 位置と環境

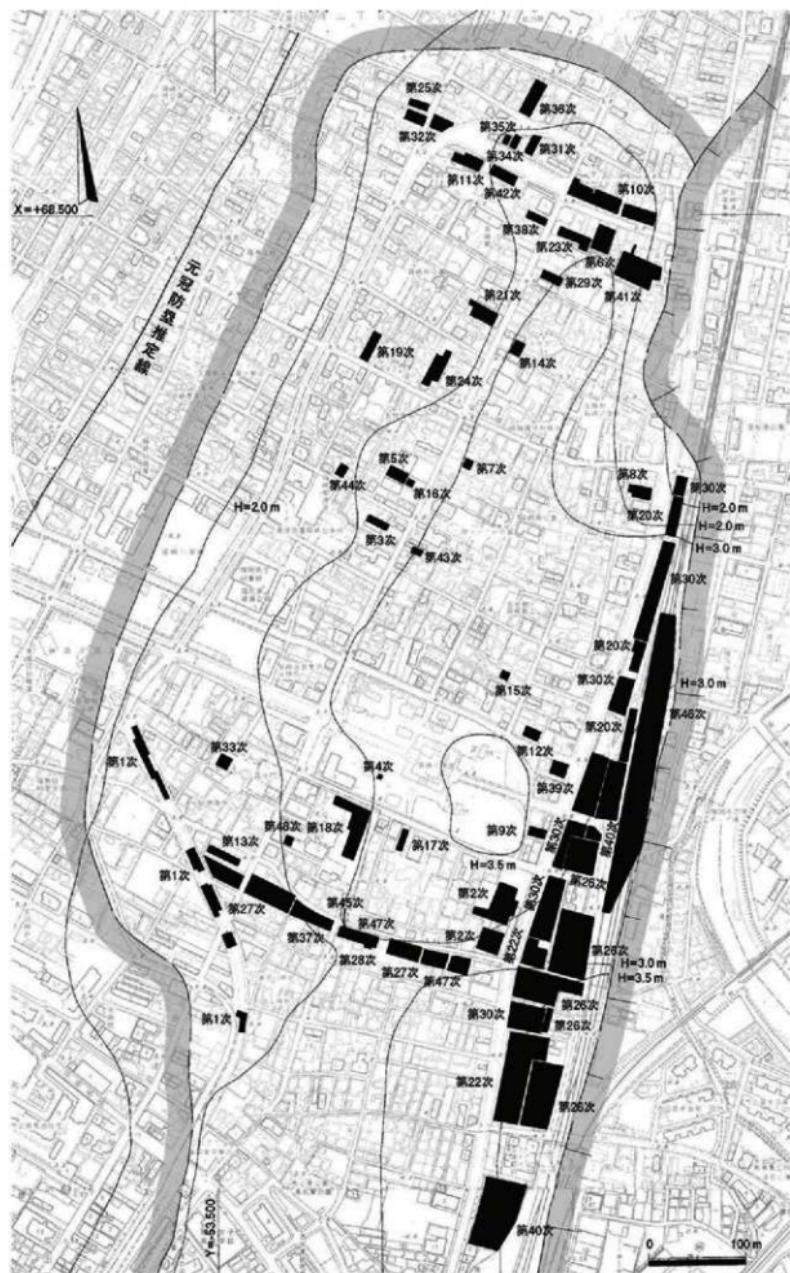
箱崎遺跡は宇美川下流域、多々良川河口左岸の博多湾に面し、南北に延びる砂丘上に位置する。この砂丘は箱崎砂層と呼ばれ、本遺跡付近から室見川河口付近まで分布しており、本遺跡を含め多くの遺跡が立地している。砂丘の形成時期は考古学的及び地質学的調査成果から縄文時代後期以降と考えられている。本遺跡が分布しているのは概ね南北 1000m、東西 500m の範囲で標高 2.0m ~ 3.5m を測る。

本遺跡は 1983 年の地下鉄建設に伴う第 1 次調査以来、40 回を超える調査が行われているが、調査が本格化するのは 1990 年代以降で、縄文時代晚期～近世に至る各時期の遺構、遺物が確認されている。縄文時代晚期～弥生時代は第 6 次調査において出土した磨製石斧が最も古く、縄文時代晚期～弥生時代前期初頭のものと考えられるが、該期の遺構に伴わない。弥生時代中期～後期の土器は 18・30 次調査で確認されている。古墳時代は竪穴住居や円形及び方形周溝墓等が確認されている。8 次調査では飯蛸壺を多量に出土しており、生業を考える上で興味深い。奈良時代になると遺物は散見されるものの遺構については判然としない。10 世纪に入ると以降の箱崎遺跡の中心となる宮崎宮が創建される。延喜 21 年に八幡神の託宣により、穂波郡大分宮から遷座して延長元年に建てられたとされる。それは大分宮の節会に参詣する大宰府の役人が電門宮に不敬を行う、郡司百姓等が賤謫するに陥る山越えをしなければならない、放生会を行うのに晦ではないため不適当であるという 3 つの理由からとされる。しかし実際のところ、新羅に対する宗教的防衛や、この地が対外貿易の地点として重要であったことも大きく作用したと考えられている。この時期の遺構は後の時期に比べはほど多くなく、宮崎宮の東を中心に分布する。これ以降遺跡は西側に拡大して行き、13 世纪代以降にはほぼ全域に分布する。また 32、36 次調査によって遺跡の範囲が北及び北東側に拡大することが確認されている。

周辺の遺跡をみると南へ続く砂丘上に吉塚本町遺跡群、吉塚祝町遺跡、堅粕遺跡群、吉塚遺跡群、博多遺跡群が存在している。吉塚本町遺跡群は弥生時代～古代にかけての遺物、遺構が確認されている。出土する瓦や硯から公的施設の存在が考えられている。吉塚祝町遺跡は道路建設に伴って 1996 年に確認された遺跡である。遺跡を縦断するように行われた第 1 次調査では弥生時代から中世に至る各時期の遺構が確認され、弥生時代の壠塁墓、古墳時代の住居址、横穴式石室、石棺墓、土壙墓、古代～中世の集落が検出されており、古代においては越州窯系青磁が多く出土しており注目されている。中世については 13 世纪～14 世纪前半を中心にして、それ以降急速に衰退する。堅粕遺跡群は吉塚本町遺跡群の南に位置し、弥生時代～古代にかけての遺構が確認されている。北側に弥生時代～古墳時代の遺構が集中し、南側に古墳時代後期から古代の遺構が多くみられる。古代においては越州窯系青磁、綠釉陶器、墨書き土器等の出土遺物から公的施設が存在する可能性が考えられている。吉塚遺跡群は吉塚祝町遺跡、堅粕遺跡群の南東に位置し、弥生時代～近世に至る遺物、遺構が検出されている。特筆すべき遺物として貨泉の出土が挙げられる。吉塚遺跡群の南には国際貿易都市として中世を代表する遺跡の一つであり、箱崎遺跡と関係の深い博多遺跡群が位置する。出土する輸入陶磁器類は質、量共に他を圧倒している。調査はすでに 140 回を超え、弥生時代～近世に至る遺構、遺物が確認されている。さらに南には住吉神社遺跡が位置する。2004 年に第 1 次調査が行われ、中世の遺構が確認されている。



第1図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)



第2図 箱崎遺跡調査区位置図 (1/5,000)

## 2. これまでの調査

調査次数	所在地	面積	調査期間	時期	主な遺構	報告書
第1次	馬出5丁目地内	5000 m <sup>2</sup>	1963.7.4~12.18	12世紀後半~15世紀	井戸 土坑 溝 墓葬遺構	第193集
第2次	猪崎1丁目 16-32他	1500 m <sup>2</sup>	1966.11.22~1967.1.20	10世紀後半~15世紀	墳物地盤 墳物地盤状跡構 井戸 土坑 溝 砂土層 鳥石遺構	第79集(高)
第3次	猪崎1丁目 273-1	156 m <sup>2</sup>	1990.1.9~2.21	12世紀中葉~15世紀	井戸 土坑 溝	第262集
第4次	猪崎1丁目 2761	199.75 m <sup>2</sup>	1989.7.5	11世紀	土坑(瓦罐)	年報V64
第5次	猪崎1丁目 25・27	216 m <sup>2</sup>	1991.9.9~10.20	12世紀~15世紀	獨立柱建物 排列 井戸 土坑 溝 墓葬遺構	第273集
第6次	猪崎3丁目 2437-1・4	430 m <sup>2</sup>	1994.10.20~1995.1.31	12世紀後半~13世紀	井戸 土坑 溝	第497集
第7次	猪崎1丁目 2711他	85 m <sup>2</sup>	1994.11.15~12.27	12世紀前半~13世紀	井戸 土坑	第499集
第8次	猪崎1丁目 2549-1他	225 m <sup>2</sup>	1996.10.1~11.14	古墳時代	12世紀前半~13世紀 古墳時代の壇穴住居 売土 中世の墓 井戸 土坑	第591集
第9次	猪崎1丁目 1935-1	191 m <sup>2</sup>	1996.10.2~10.29	11世紀~12世紀	井戸 土坑 溝	第650集
第10次	猪崎3丁目地内	1026 m <sup>2</sup>	1996.11.11~1997.3.31	12世紀後半~13世紀	井戸 土坑 溝	第551集
第11次	猪崎3丁目 2266-1他	385 m <sup>2</sup>	1997.4.30~6.27	12世紀後半~14世紀	井戸 土坑 ピット	第592集
第12次	猪崎1丁目 2606-1・3	155 m <sup>2</sup>	1997.8.19~9.22	11世紀~13世紀	井戸 土坑 溝 墓葬遺構	整理中
第13次	馬出5丁目 520-2	297 m <sup>2</sup>	1997.10.27~12.2	15世紀	獨立柱建物 井戸 土坑 溝	第592集
第14次	猪崎1丁目 2615	36 m <sup>2</sup>	1998.4.2~5.23	12世紀後半~14世紀前半	土坑 溝	第625集
第15次	猪崎1丁目 2615	36 m <sup>2</sup>	1998.5.25~6.5	11世紀後半~12世紀	土坑 溝	第610集
第16次	猪崎1丁目 2725	56 m <sup>2</sup>	1999.1.18~12.9	11世紀~15世紀	井戸 土坑	第703集
第17次	猪崎1丁目 20-19	40 m <sup>2</sup>	1999.3.13~3.31	12世紀中葉~17世紀	土坑 溝 ピット	第704集
第18次	馬出5丁目 470	920 m <sup>2</sup>	1999.6.14~9.28	12世紀中葉~16世紀	井戸 土坑 溝	第664集
第19次	猪崎1丁目 2949-1	160 m <sup>2</sup>	1999.7.29~8.27	12世紀後半~14世紀前半	獨立柱建物 井戸 土坑 溝	第664集
第20次	猪崎1丁目地内	882 m <sup>2</sup>	1999.12.13~2000.3.31	古墳時代 11~13世紀	古墳時代の壇穴住居 中世の墓 井戸 土坑 墓葬遺構	第768集
第21次	猪崎1丁目 2480	95 m <sup>2</sup> (2面)	2000.3.29~6.26	12世紀中葉~14世紀	獨立柱建物 井戸 土坑 溝 墓葬遺構	第706集
第22次	馬出5丁目・猪崎1丁目	2976 m <sup>2</sup>	2000.7.24~2001.3.31	古墳時代 古代末~中世	古墳時代の壇穴住居 古代末~中世の墓 井戸 土坑 墓葬遺構	第811集
第23次	猪崎3丁目 2404	188 m <sup>2</sup>	2000.9.29~11.2	13世紀~17世紀	井戸 土坑	第704集
第24次	猪崎1丁目 2511他	397 m <sup>2</sup>	2000.10.23~2001.1.21	12世紀後半~14世紀前半	井戸 土坑 木棺墓	第768集
第25次	猪崎3丁目地内	87 m <sup>2</sup>	2001.4.16~4.26	13世紀後半~14世紀	土坑	整理中
第26次	猪崎1丁目地内	5255 m <sup>2</sup>	2001.5.5~2002.3.29	古墳時代 11~13世紀	古墳時代の壇塚墓 中世の墓 井戸 土坑 墓葬遺構	第616集
第27次	馬出5丁目地内	1449 m <sup>2</sup>	2001.6.7~2002.2.10	12世紀~近世	井戸 土坑 溝 墓葬遺構	第812集
第28次	馬出5丁目 2448	41 m <sup>2</sup>	2001.7.2~7.12	中世後半	土坑 ピット	整理中
第29次	猪崎3丁目 2296他	80 m <sup>2</sup>	2002.4.1~4.26	12世紀~13世紀	土坑 溝 地下道遺構	第813集
第30次	猪崎1丁目地内	4997 m <sup>2</sup>	2002.4.9~2003.5.13	古墳時代 古代末~中世	古墳時代 古代末~中世 墓室 墓室柱建物 井戸 土坑 溝	整理中
第31次	猪崎3丁目 3356-1	80 m <sup>2</sup>	2002.5.9~6.14	12世紀~13世紀	井戸 土坑 溝	第813集
第32次	猪崎3丁目地内	442 m <sup>2</sup>	2002.4.22~9.20	13世紀~	井戸 土坑 溝 墓葬遺構	整理中
第33次	馬出5丁目 502-503	160 m <sup>2</sup>	2002.9.24~10.8	12世紀~	井戸 土坑 溝 墓葬遺構	整理中
第34次	猪崎3丁目 3356-1	70 m <sup>2</sup>	2002.11.14~12.2	12世紀後半~14世紀前半	井戸 土坑	整理中
第35次	猪崎3丁目 9.33	32 m <sup>2</sup>	2002.12.2~12.10	13世紀後半~14世紀	井戸 土坑	整理中
第36次	猪崎3丁目 3380	199 m <sup>2</sup>	2002.12.11~2003.2.21	14世紀~15世紀	井戸 土坑 溝	整理中
第37次	馬出5丁目地内	493 m <sup>2</sup>	2002.12.13~2003.3.31	12世紀~	井戸 土坑 溝 墓葬遺構	整理中
第38次	猪崎3丁目 9.49	90 m <sup>2</sup>	2003.2.3~3.8	13世紀~近世	井戸 土坑	第814集
第39次	猪崎1丁目 2031他	149 m <sup>2</sup>	2003.4.10~5.9	11世紀~12世紀	井戸 土坑 溝	第854集
第40次	猪崎1丁目地内1丁目B30	2900 m <sup>2</sup>	2003.5.14~	墳物地盤古墳時代~近世	井戸 土坑 溝 小石室 方形柱状跡構 丹別原古状跡構	整理中
第41次	猪崎3丁目 2426他	1000 m <sup>2</sup>	2003.9.16~12.11	12世紀後半~13世紀	井戸 土坑 溝 墓葬遺構	第854集
第42次	猪崎3丁目	260 m <sup>2</sup>	2003.10.21~2004.1.21	12世紀~14世紀	井戸 土坑 溝 方形柱状跡構	整理中
第43次	猪崎1丁目 2697-1	83 m <sup>2</sup>	2003.11.21~12.5	11世紀~12世紀	土坑 ピット	整理中
第44次	猪崎1丁目 35-3	114 m <sup>2</sup>	2004.2.15~3.15	12世紀~14世紀	井戸 土坑 ピット	第854集
第45次	馬出5丁目地内	152 m <sup>2</sup>	2004.3.1~3.22	12世紀~13世紀	井戸 土坑 ピット	整理中
第46次	猪崎1丁目地内	3000 m <sup>2</sup>	2004.7.1~	古墳時代後期~近世	井戸 土坑 溝	整理中
第47次	馬出5丁目地内	1000 m <sup>2</sup>	2004.7.21~	古代後半~中世後半	井戸 土坑 溝	整理中
第48次	馬出5丁目地内	87 m <sup>2</sup>	2004.11.26~11.28	近世	土坑 ピット	整理中

## II. 第39次調査

### 1. 調査に至る経過

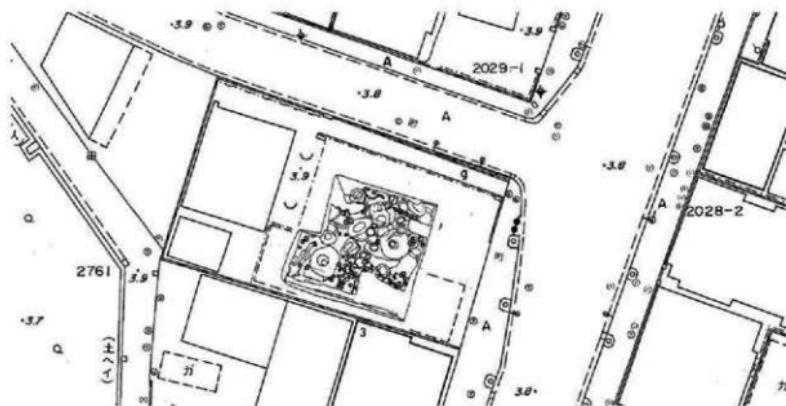
平成15年1月9日、古田暢氏より福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課へ共同住宅建設に伴う福岡市東区箱崎1丁目2031他地内における埋蔵文化財の事前審査について依頼がなされた。これを受けた埋蔵文化財課では事業計画地が周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡群に含まれることから試掘調査が必要であるとの判断がなされた。同年3月11日、試掘調査を行い、その結果、井戸、柱穴等の遺構が検出された。この成果をもとに協議を重ねたが現状での設計変更は不可能との判断から記録保存のための発掘調査を行うこととなった。古田氏と福岡市の間で埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、調査は平成15年4月10日より開始、平成15年5月9日に終了した。

最後になりましたが、古田氏には調査に際し、多大なご理解とご協力を頂いた。記して感謝いたします。

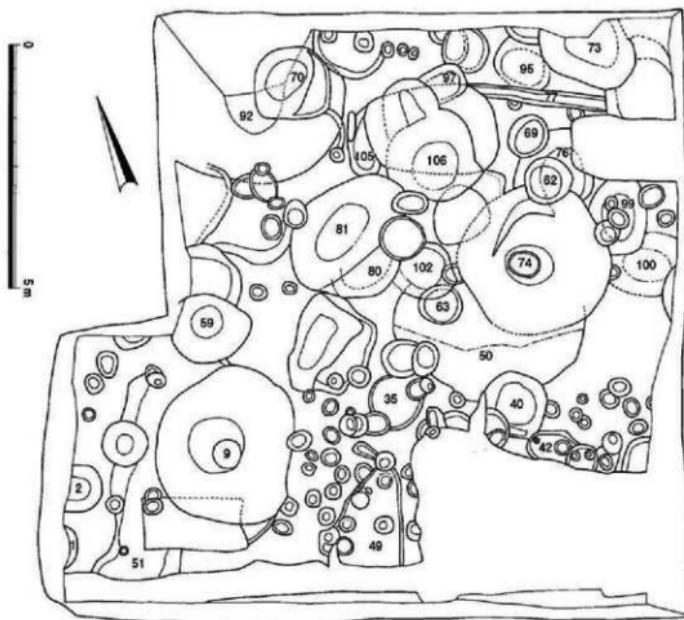
### 2. 調査体制

調査主体 福岡市教育委員会

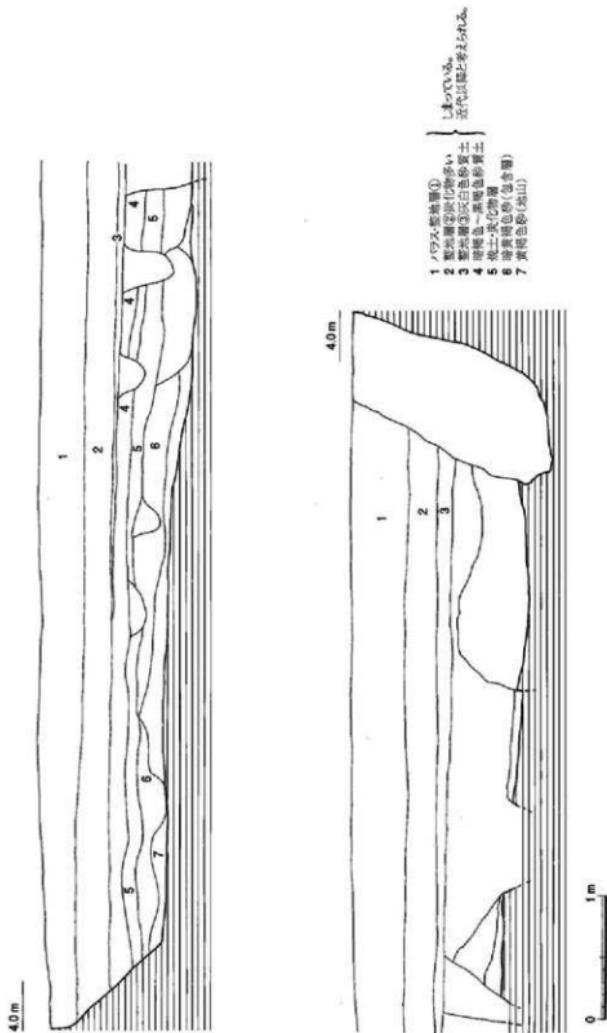
調査総括	文化財部長	山崎純男
	埋蔵文化財課長	山口譲治 山崎純男（前任）
	調査第2係長	池崎謙二 田中寿夫（前任）
事前審査	事前審査係長	浜石哲也 池崎謙二（前任）
	主任文化財主事	吉留秀敏 米倉秀紀（前任）
	事前審査係	久住猛夫 田上勇一郎（前任）
調査庶務	文化財整備課管理係	御手洗清
調査担当	調査第2係	中村啓太郎
調査員	上田龍児	
発掘作業	小川秀雄 徳永栄彦 春吹哲男 宮崎雅秀 竹原吉秋 花田昌代 野田トヨ子 井上ヨシ子 田中フキ子 光安晶子 大庭智子 村崎祐子 藤澤義一 増田豊 上田龍児 渡辺誠 田端名穂子 中村幸子 花田則子 安藤史郎 阿部純子 稻崎龍也 崎村雄介 永松弘恵	
整理作業	林由紀子 下川奈津代 釜崎法子 原陽子 三栗野雅子	



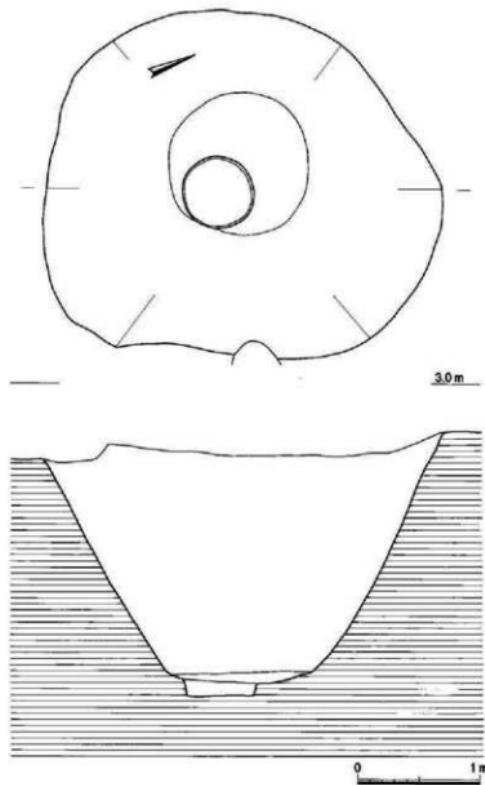
第3図 第39次調査区位置図 (1/500)



第4図 道構配置図 (1/100)



第5図 南壁土層実測図 (1/40)

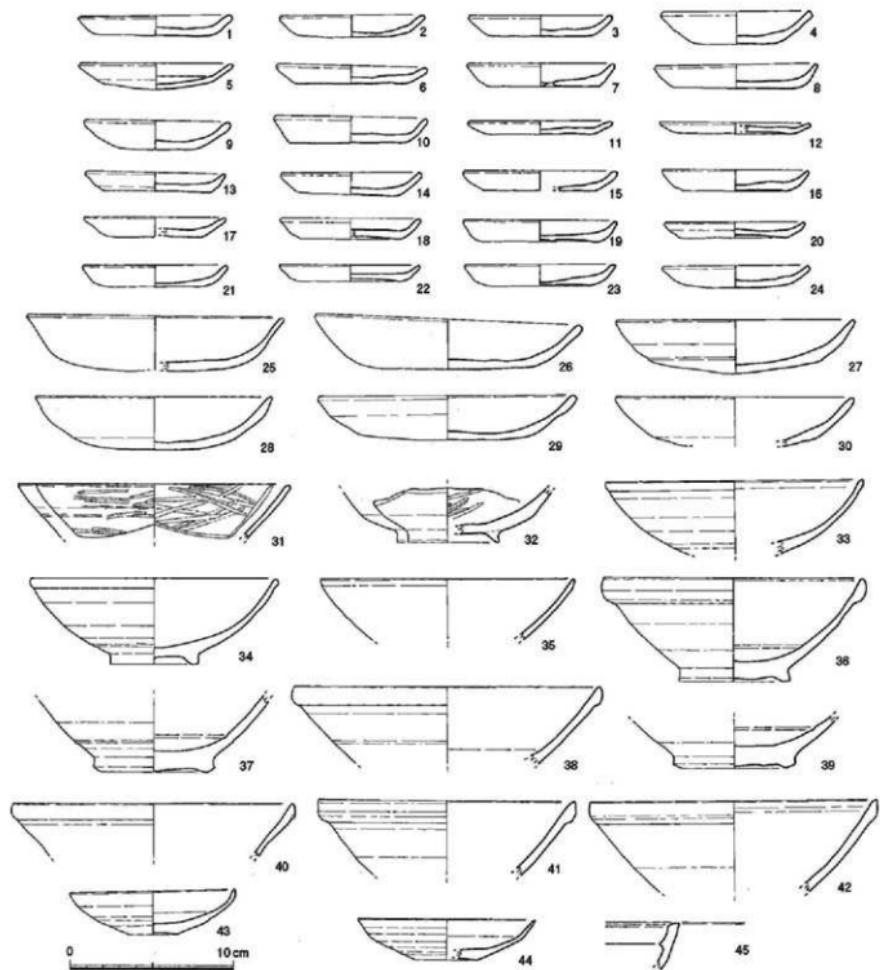


第6図 SE-9実測図 (1/40)

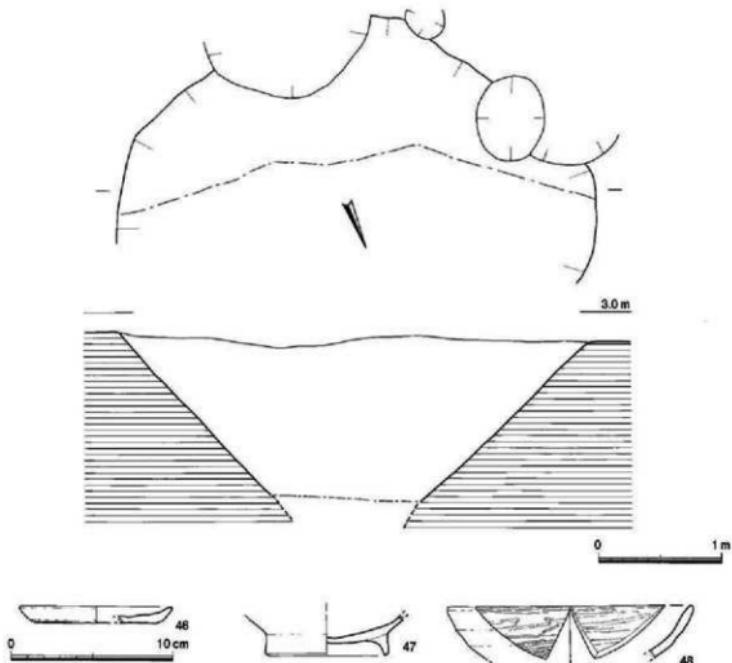
### 3. 調査概要

第39次調査区は東区箱崎1丁目2031他に所在し、遺跡の中央東寄り、筥崎八幡宮の東に接して位置する。調査は重機による表土掘削から開始した。廃土処理の関係から調査区を南北に2分割し、南側から順に調査を行った。

基本層序は現地表から第1層 バラス・整地層①、第2層 整地層②(炭化物多い)、第3層 整地層③(灰白色砂質土)、第4層 暗褐色～黒褐色砂質土、第5層 焼土・炭化物層、第6層 暗黃褐色砂、第7層 黄褐色砂(地山)となり、第7層上面で標高2.7m～3.1mを測り、東から西に向かい傾斜する。遺構は基本的に第4～6層から掘り込まれるが、時間的都合と平面での検出が困難であるため、第7層上面で検出した。検出した遺構は井戸5基、土坑31基、溝状遺構2条、柱穴等である。調査面積は149.17 m<sup>2</sup>を測る。



第7図 SE-9 出土遺物実測図 (1/3)



第8図 SE-50 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

#### 4. 調査の記録

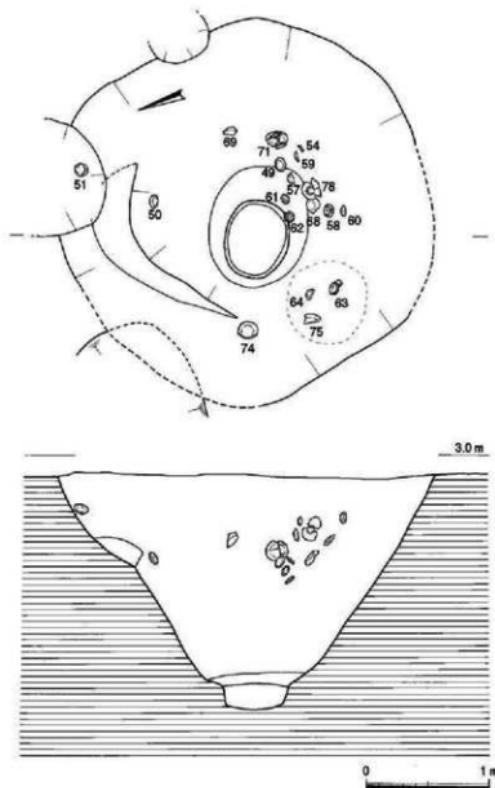
##### 1) 井戸

井戸は5基検出した。調査区の中央から北側に集中する。

##### SE-9 (第6図)

調査区西に位置する。掘り方はやや不整な楕円形を呈し、長軸321cm、短軸281cm、深さ232cmを測る。掘り方最下部南寄りで井筒を据えた痕跡が確認されたが木質等は残っていないかった。円形を呈し、径60cm程度と考えられる。埋土上層の黒褐色砂質土(炭混じり)からは土師器壺、小皿等がまとまって出土しており、堆積状況から井筒を抜いた後投棄されたのではないかとおもわれる。

出土遺物(第7図)1~24は土師器の小皿である。口径8.6cm~10.0cm、器高0.7cm~2.0cmを測る。1~6・11・24の底部はヘラ切りで、5・24は板状圧痕を有する。他の底部は糸切りで12~17・19~23は板状圧痕を有する。25~30は土師器の壺である。口径14.4cm~15.8cm、器高2.8cm~3.3cmを測る。25の底部はヘラ切りで板状圧痕を有する。他は底部糸切りで板状圧痕を有する。31・32は瓦器碗である。31は内外面ともヘラ磨きを施す。33~42は白磁碗である。IV類が多くを占める。43・44は白磁皿である。45は陶器の鉢である。



第9図 SE-74 実測図 (1/40)

#### SE-50 (第8図)

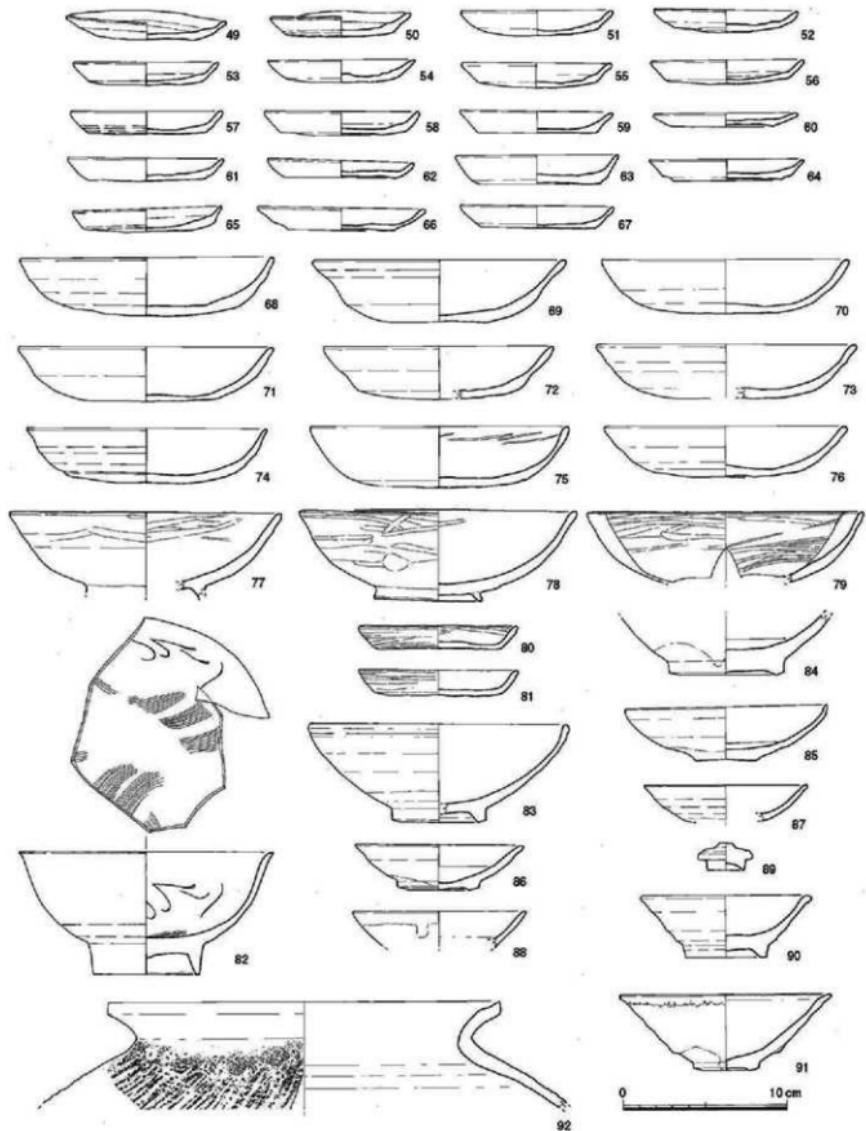
調査区中央やや東寄りに SE-74 に切られて位置する。掘り方は楕円形を呈し、長軸 380 cm を測る。遺構が調査区の反転部分にかかったため安全上完掘できなかった。

出土遺物（第8図）46は土師器の小皿。復元口径 9.4 cm、器高 1.0 cm を測る。底部はヘラ切り。47・48は土師器塊である。

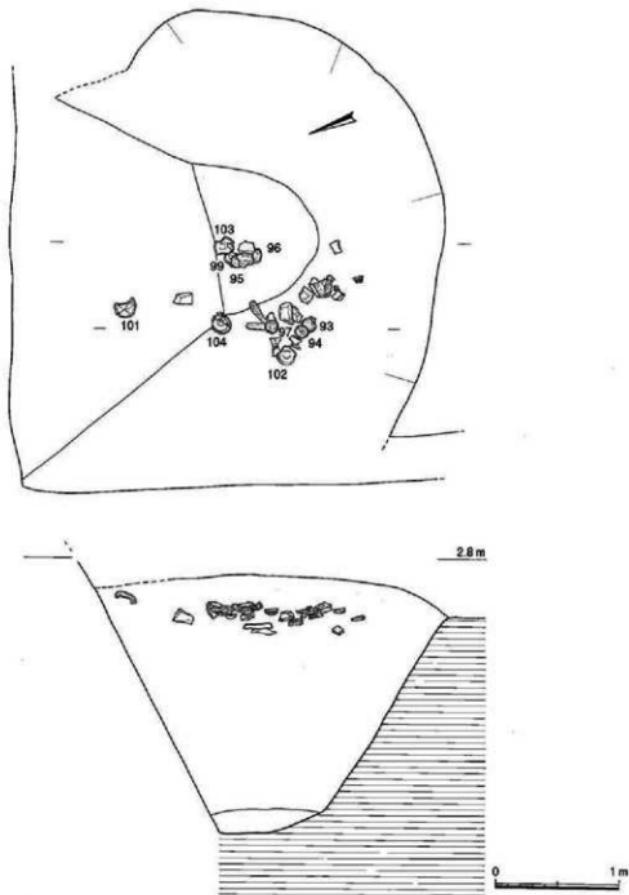
#### SE-74 (第9図)

SE-50 を切って位置する。掘り方は円形を呈し、上段北側にテラスが付く。径 320 cm 前後、深さ 195 cm を測る。掘り方最下部中央で井筒を据えた掘り方が確認されたが木質等は残っていないかった。楕円形を呈し長軸 60 cm 程度と考えられる。

出土遺物(第10図)49～67は土師器の小皿である。口径 8.6 cm～10.4 cm、器高 0.8 cm～1.5 cm を測る。49～56の底部はヘラ切りで板状圧痕を有する。57～67は糸切りで 62・66以外は板状圧痕を有する。68～76は土師器の环である。口径 14.2 cm～15.8 cm、器高 3.1 cm～3.9 cm を測る。68～71がへ



第10図 SE-74出土遺物実測図 (1/3)

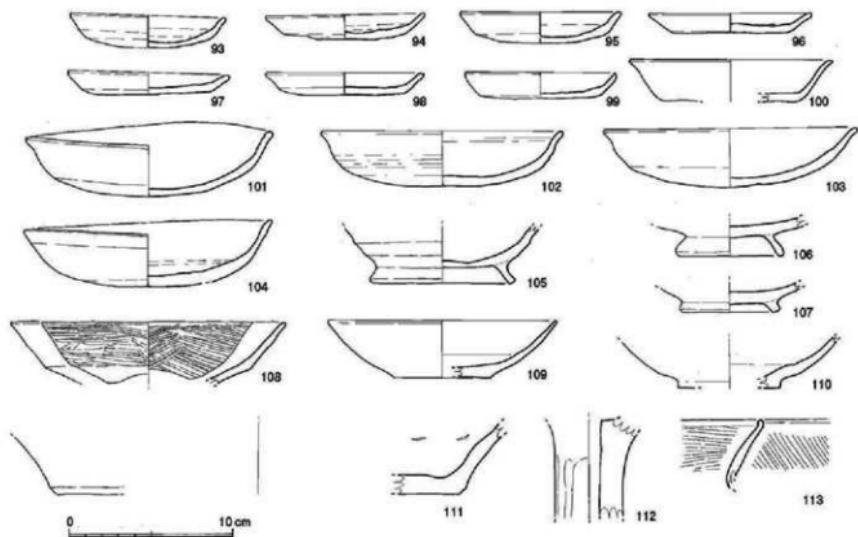


第11図 SE-92実測図(1/40)

ラ切り、72～76は糸切りでいずれも板状压痕を有する。77～79は瓦器碗である。口径16.6cm～17.0cmを測る。内外面共にヘラ磨きを施す。80・81は瓦器小皿である。口径9.8cm、器高1.4cm～1.6cmを測る。82～84は白磁碗である。82がV類、83がII-1類、84がIV類。85～88は白磁皿である。89は青白磁の蓋。90は高麗青磁の皿。91は天目茶碗。92は須恵質の甕である。復元口径24.0cmを測る。

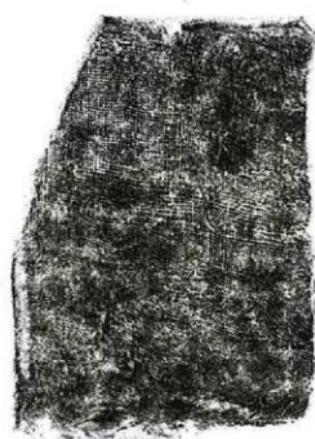
#### SE-92(第11図)

調査区北西隅に位置し、調査区外に延びる。調査区際で検出されたため完掘できなかった。掘り方は円形もしくは楕円形を呈するとおもわれ、深さ203cmを測る。井筒及びそれを据えるための掘り



0

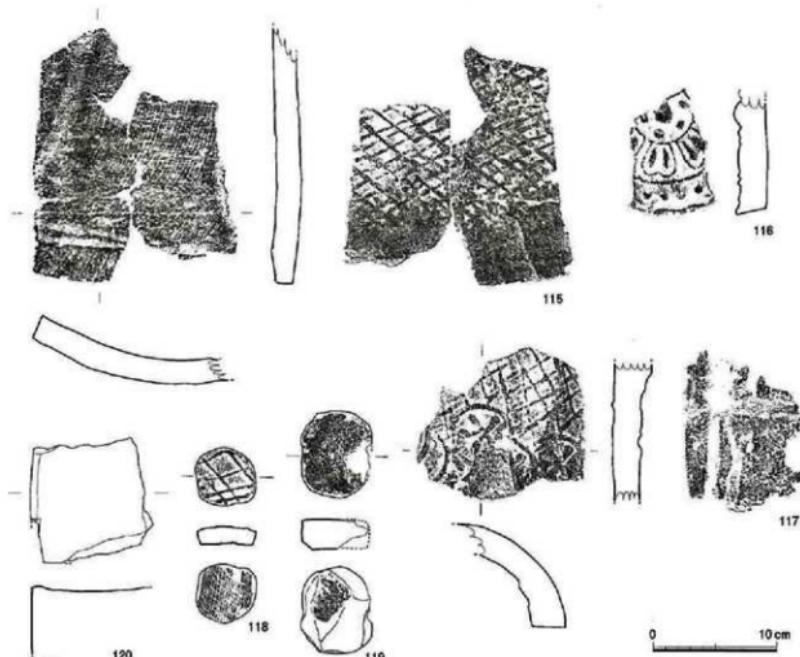
10 cm



10 cm



第12図 SE-92出土遺物実測図(1/3・1/4)



第13図 SE-92出土遺物実測図(1/4)

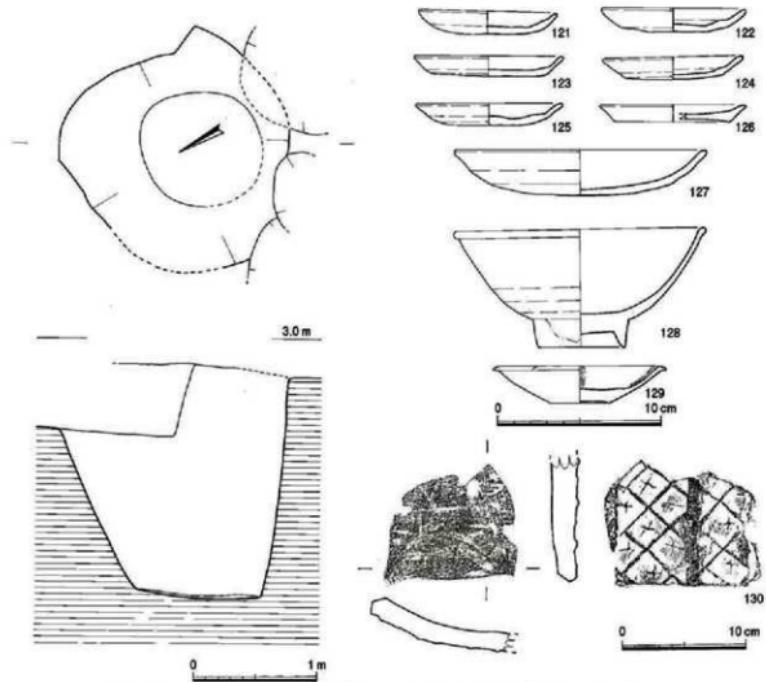
方は確認されなかった。

出土遺物(第12・13図) 出土遺物の一部は上層よりまとめて出土した。93~99は土師器の小皿である。口径9.6cm~10.0cm、器高1.3cm~2.1cmを測る。底部はヘラ切りで板状圧痕を有する。100~104は土師器の壊である。100は口径12.4cm、器高2.5cm、他は14.8cm~15.7cm、器高3.2cm~3.7cmを測る。底部はヘラ切りで101以外板状圧痕を有する。105・106は土師器の塊である。107・108は黒色土器B類の碗である。109は上層出土の白磁皿。110は須恵器の壊。底部は糸切り。111は須恵質の甕。112は土師器の高坪。113は古式土師器の甕で混入品。114~120は瓦。114・115は平瓦である。凸面は114が細かい方形の格子目叩き、115が粗い格子目叩きを施す。内面は布目が残る。116は軒丸瓦の瓦当部。復弁蓮華文で外区に珠文、内区に蓮子を配する。117は丸瓦。叩打痕文字瓦で凸面は格子目叩きで、丸開きの「大」の字がみられる。凹面には布目が残る。尚、同一の叩打痕文字の可能性がある瓦が第22次調査で出土している。118・119は瓦玉で平瓦を再加工したものである。120は磚である。

#### SE-106(第14図)

SE-74の北に位置する。掘り方は円形を呈し、径190cm前後、深さ177cmを測る。掘り方上部は概乱されている。井筒は確認できなかったが深さから考えて井戸とした。

出土遺物(第14図) 121~126は土師器の小皿。口径8.6cm~9.2cm、器高1.1cm~1.5cmを測る。



第14図 SE-106実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3・1/4)

底部は121～125がヘラ切りで122以外板状圧痕を有する。126が糸切り。127は土師器の壺。復元口径15.4cm、器高2.8cmを測る。底部はヘラ切りで板状圧痕を有する。128は白磁碗V-3a類。129は白磁皿IV-2b類。130は凸面は粗い格子目叩きで格子の中に十字形の文様がみられる。凹面は布目が残る。他に滑石製品、鉄釘等が出土している。

## 2) 土坑

### SK-2 (第15図)

調査区西に位置し、調査区外に延びる。梢円形を呈するとおもわれる。長さ67cm以上、幅90cm、深さ53cmを測る。

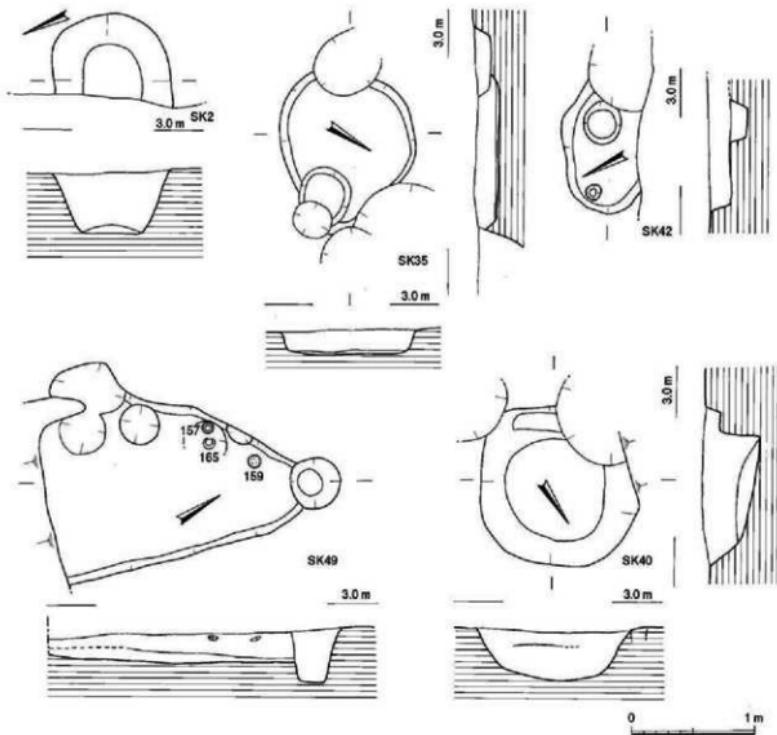
出土遺物(第16図)131は土師器の小壺である。復元口径9.5cmを測る。底部はヘラ切りで板状圧痕を有する。

### SK-35 (第15図)

調査区南に位置し、梢円形を呈する。長さ140cm程度、幅110cm、深さ20cmを測る。遺物は土師器の細片が出土している。

### SK-40 (第15図)

調査区南東に位置し、SE-50を切る。円形を呈し、南側に段が付く。長さ140cm、幅130cm、深



第15図 SK-2・35・40・42・49実測図 (1/40)

さ50cmを測る。

出土遺物(第16図)132~135は土師器の小皿である。口径8.8cm~9.4cm、器高1.1cm~1.2cmを測る。132がヘラ切りで板状圧痕を有する。他は糸切り。136・137は土師器の环でそれぞれ口径15.6cm、15.4cmを測る。137の底部は糸切り。138・139は土師器の高环。141~148は白磁。141は皿か。他はIV類、V類の碗。149~152は青磁。149は龍泉窯系青磁碗I-3a類。150・151は龍泉窯系青磁皿I-2c類。152は壺。153は平瓦、154は丸瓦。

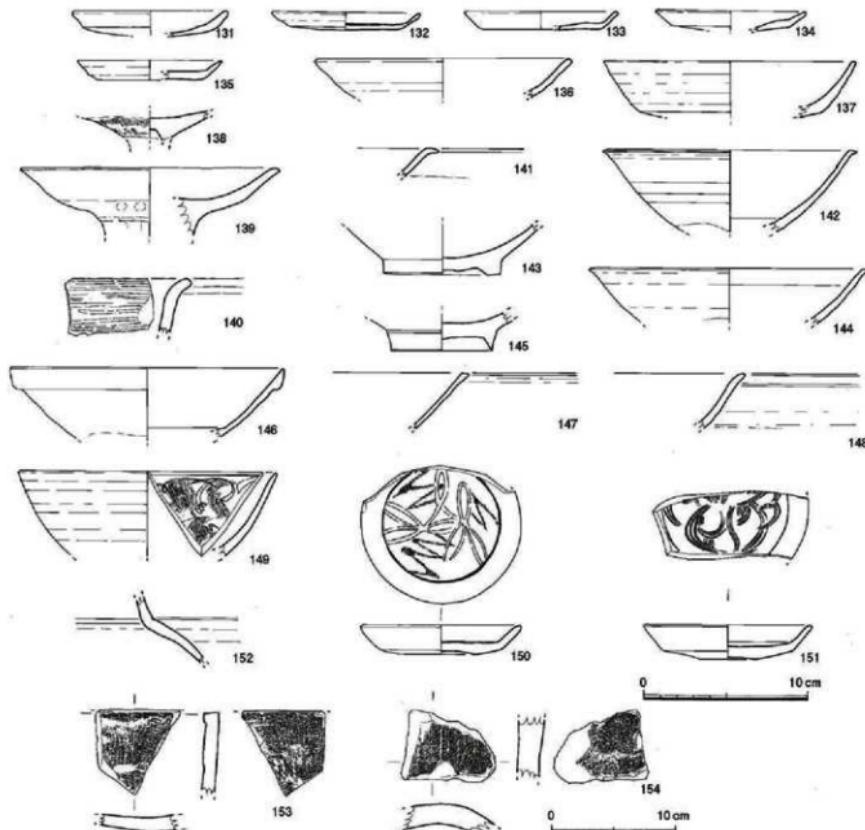
#### SK-42(第15図)

調査区南東に位置し、SK-40を切る。南側を搬乱に切られる。楕円形を呈するとおもわれる。深さ17cmを測る。

出土遺物(第17図)155は土師器の小皿である。底部はヘラ切りで板状圧痕を有する。復元口径9.5cmを測る。156は土師器の环で復元口径17.8cmを測る。調整は内外面ともヨコナデを施す。

#### SK-49(第15図)

調査区南に位置し、南部を埋設管に切られる。楕円形を呈するとおもわれる。長さ205cm以上、



第16図 SK-2・40 出土遺物実測図 (1/3 · 1/4)

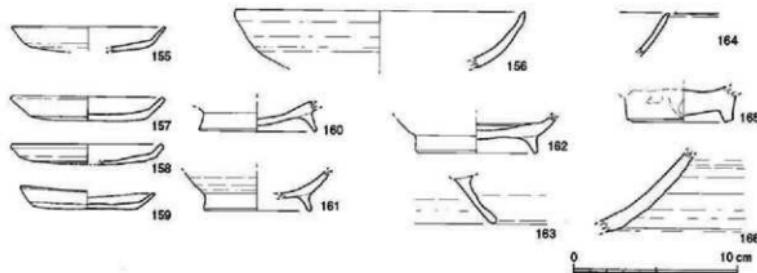
幅140cm程度、深さ22cmを測る。

出土遺物(第17図)157～159は土師器の小皿である。口径8.6cm～9.5cm、器高1.2cm～1.5cmを測る。底部はヘラ切りで157は板状圧痕を有する。160～162は土師器塊。163は高台部。164・165は白磁碗。166は土師器の鉢か。

#### SK-59(第18図)

調査区西端に位置し、西側が調査区外に延びる。楕円形を呈し、長さ140cm以上、幅150cm、深さ80cmを測る。上層からまとまって遺物が出土した。

出土遺物(第19図)167・168は土師器の小皿である。それぞれ口径は8.5cm, 8.9cm、器高0.9cm, 1.0cmを測る。底部はいずれも糸切りで板状圧痕を有する。169は白磁碗VII類。170は白磁の水注、注口部。171・172は陶器の鉢である。172は復元口径21.2cmを測る。釉は灰オリーブ色を呈し、口縁部に



第17図 SK-42・49出土遺物実測図(1/3)

目跡が残る。

#### SK-62 (第18図)

調査区北東に位置し、SE-74・SK-76を切る。円形を呈し、径81cm～91cm、深さ31cmを測る。出土遺物(第19図)173・174は土師器の小皿である。それぞれ口径は10.4cm、9.6cm、器高1.1cm、1.4cmを測る。底部は173が糸切り、174がヘラ切りで板状圧痕を有する。175は瓦器の小皿である。復元口径9.0cmを測る。内外面共にヘラミガキを施す。176・177は白磁碗。

#### SK-63 (第18図)

調査区中央に位置し、SK-102を切る。円形を呈し、径80cm、深さ30cmを測る。

出土遺物(第19図)178・179は土師器の小皿である。それぞれ口径は8.8cm、9.0cm、器高1.0cm、1.1cmを測る。底部は糸切りで、178は板状圧痕を有する。180は土師器の环で口径16.2cm、器高2.9cmを測る。底部は糸切りで、板状圧痕を有する。181は瓦器椀である。復元口径16.2cm、器高5.0cmを測る。調整は外面上位がヨコナデ、中位がヘラミガキ、下位に指頭圧痕が残る。内面はヘラミガキを施す。182～186は白磁。182・183はV類の碗で182は底部に墨書を有する。185・186はIII類の皿。187は陶器の鉢。復元口径19.2cmを測る。釉は黄褐色を呈する。口縁部に目跡が残る。

#### SK-69 (第18図)

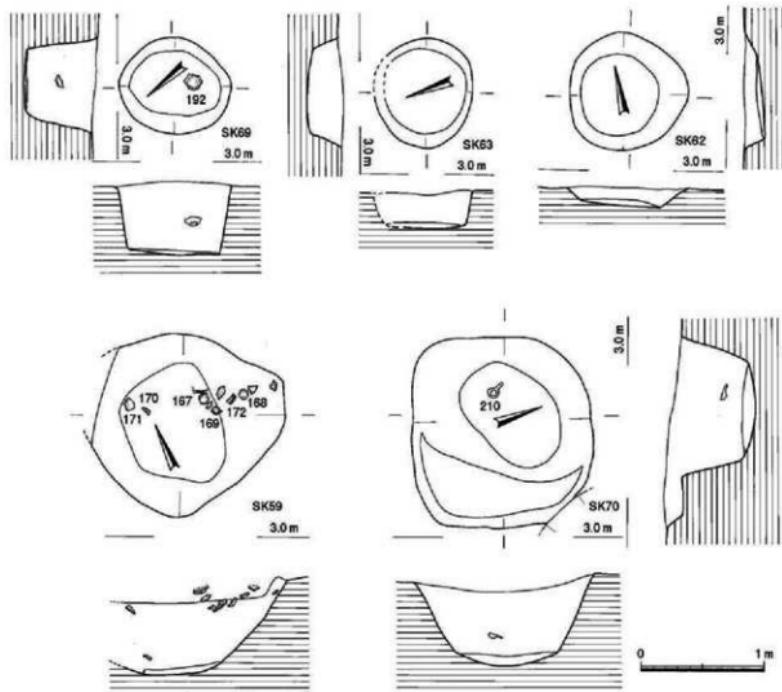
調査区北に位置し、SK-76を切る。梢円形を呈し、長さ91cm、幅79cm、深さ55cmを測る。

出土遺物(第19図)188・189は土師器の小皿である。それぞれ口径は9.4cm、9.2cm、器高1.7cm、1.3cmを測る。底部はヘラ切りで板状圧痕を有する。190は瓦器椀。191は白磁碗IV類。192は白磁の鉢。

#### SK-70 (第18図)

調査区北西に位置し、SE-92を切る。梢円形を呈し、東側に段が付く。長さ157cm、幅147cm、深さ75cmを測る。

出土遺物(第19・20図)193～195は土師器の小皿である。口径8.6cm～9.1cm、器高1.0cm～1.2cmを測る。底部はヘラ切りで193・195は板状圧痕を有する。196～199は土師器の环で復元口径14.4cm～15.4cmを測る。底部はヘラ切りで199は板状圧痕を有する。200～205は瓦器椀。復元口径14.8cm～17.6cmを測る。調整は内外面ともヘラミガキを施す。206は白磁碗。207は陶器の鉢。208は土師器の高环脚部。混入品である。209は砥石。210は鉄製の杓子。全長17.2cm、頭部は径6.5cm、深さ1.7cmを測る。211～214は平瓦。211の凸面は叩き後、ナデを施す。212・213の凸面は粗い格子目叩き、214は細かい格子目叩きを施す。いずれも凹面には布目が残る。



第18図 SK-59・62・63・69・70実測図(1/40)

#### SK-73 (第21図)

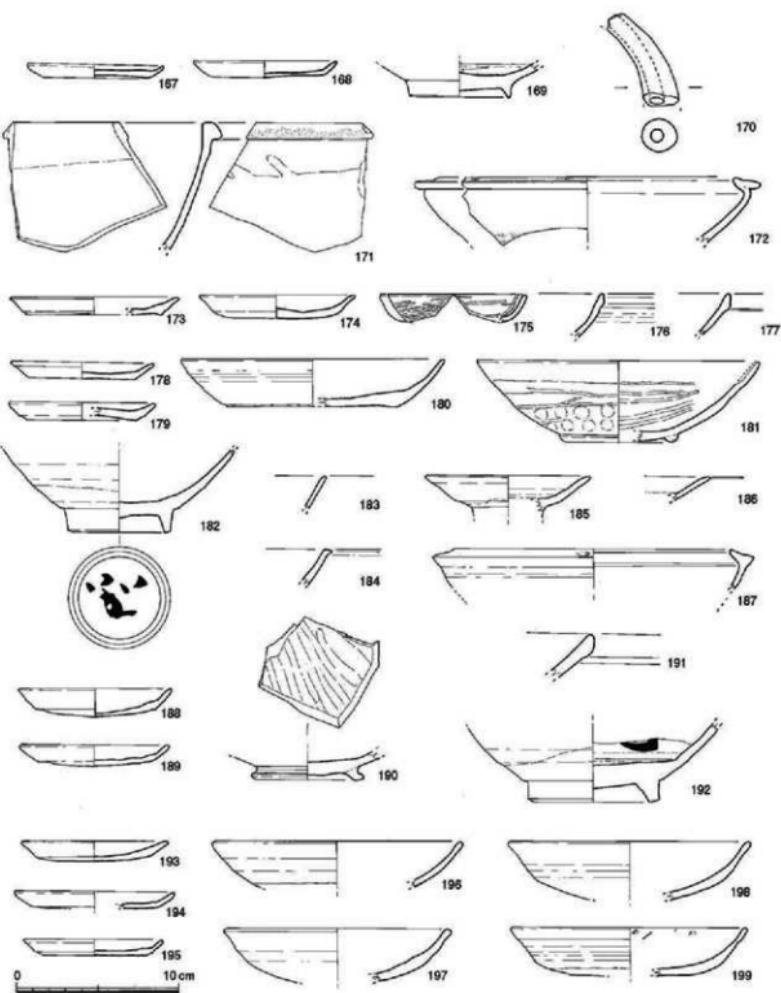
調査区北東に位置し、調査区外に延びる。楕円形を呈し、長さ190cm、幅120cm程度、深さ57cmを測る。

出土遺物（第22図）215～217は土師器の小皿である。口径9.2cm～9.3cm、器高1.2cm～1.5cmを測る。底部はヘラ切りで215は板状圧痕を有する。218は土師器の环。口径15.2cmを測る。底部はヘラ切り。219は黒色土器A類の椀。復元口径16.2cm、器高5.1cmを測る。内外面共にヘラミガキを施す。外底部に「×」印のヘラ記号を有する。220・221は白磁碗IV類。222は白磁皿IV類。

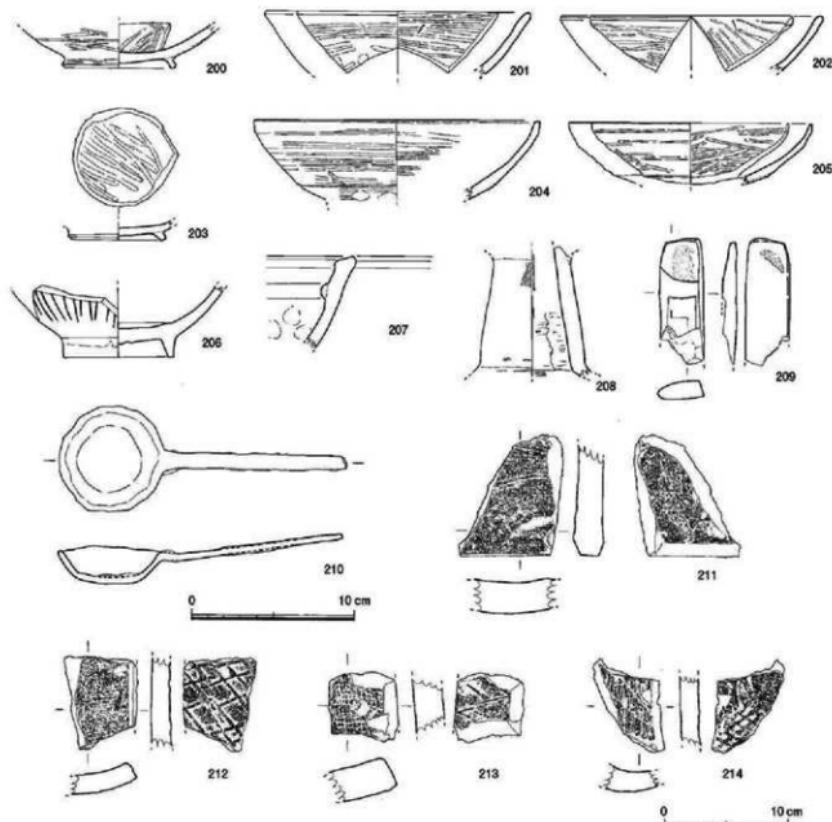
#### SK-76 (第21図)

調査区北東に位置し、SK-62・69・SE-74に切られる。平面形は楕円形か。幅158cm、深さ79cmを測る。上層から土師器の小皿や环等の遺物がまとまって出土した。

出土遺物（第22図）223～240は土師器の小皿である。口径8.8cm～9.2cmを測る。223は底部に穿孔する。223～239は底部はヘラ切りで225～231・233・237～239は板状圧痕を有する。240は糸切りで板状圧痕を有する。241～247は土師器の环である。底部はヘラ切りで242・244は板状圧痕を有する。248は白磁碗。249・250は白磁皿。251は青磁の壺。252は鉄製の筋縫車で



第19図 SK-59・62・63・69・70出土遺物実測図 (1/3)



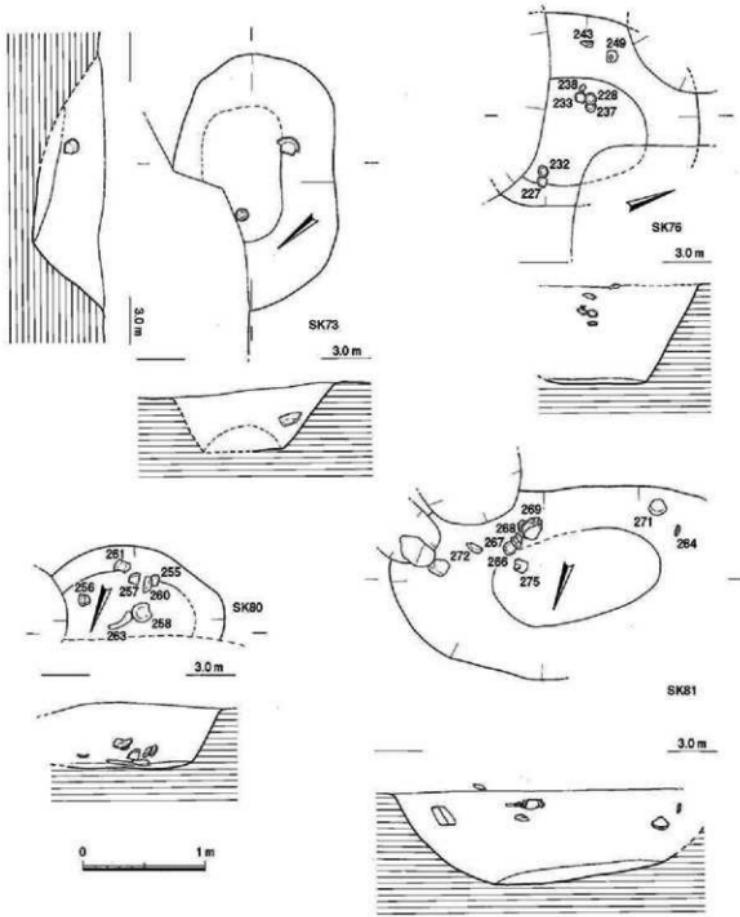
第20図 SK-70出土遺物実測図 (1/3 · 1/4)

ある。253は平瓦。

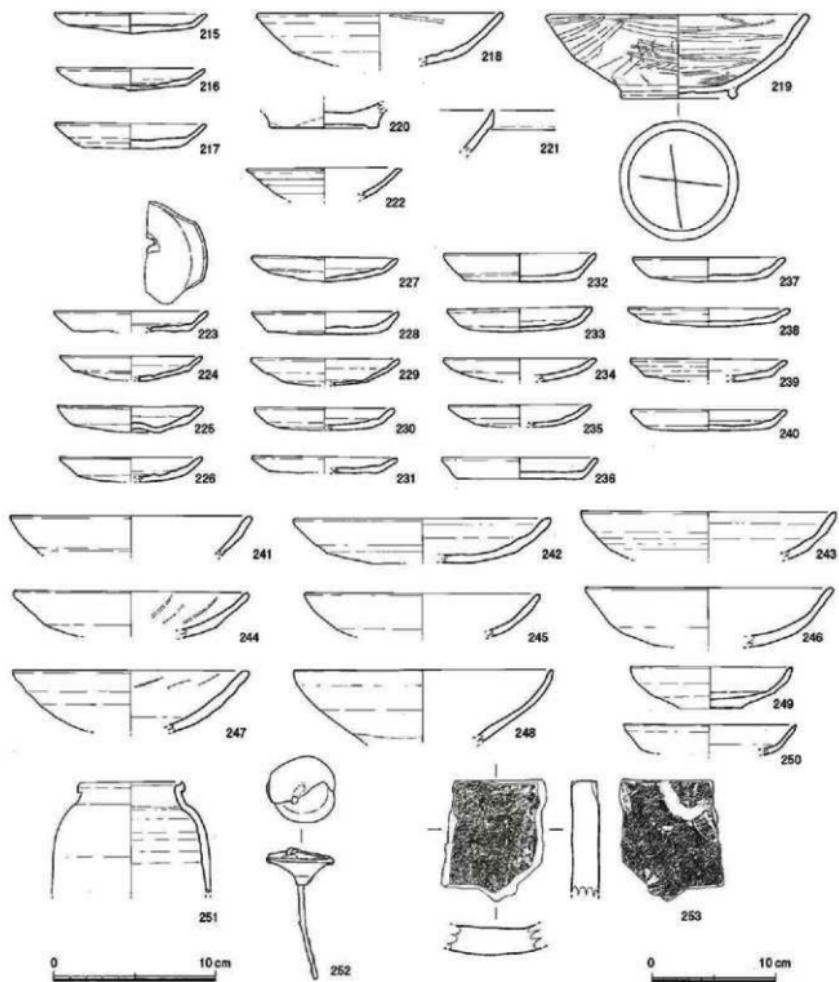
#### SK-80 (第21図)

調査区中央に位置し、SK-81に切られる。当初SK-81と区別できず、東側を半裁し、断面で確認した段階で判別した。平面形は梢円形か。深さ55cmを測る。

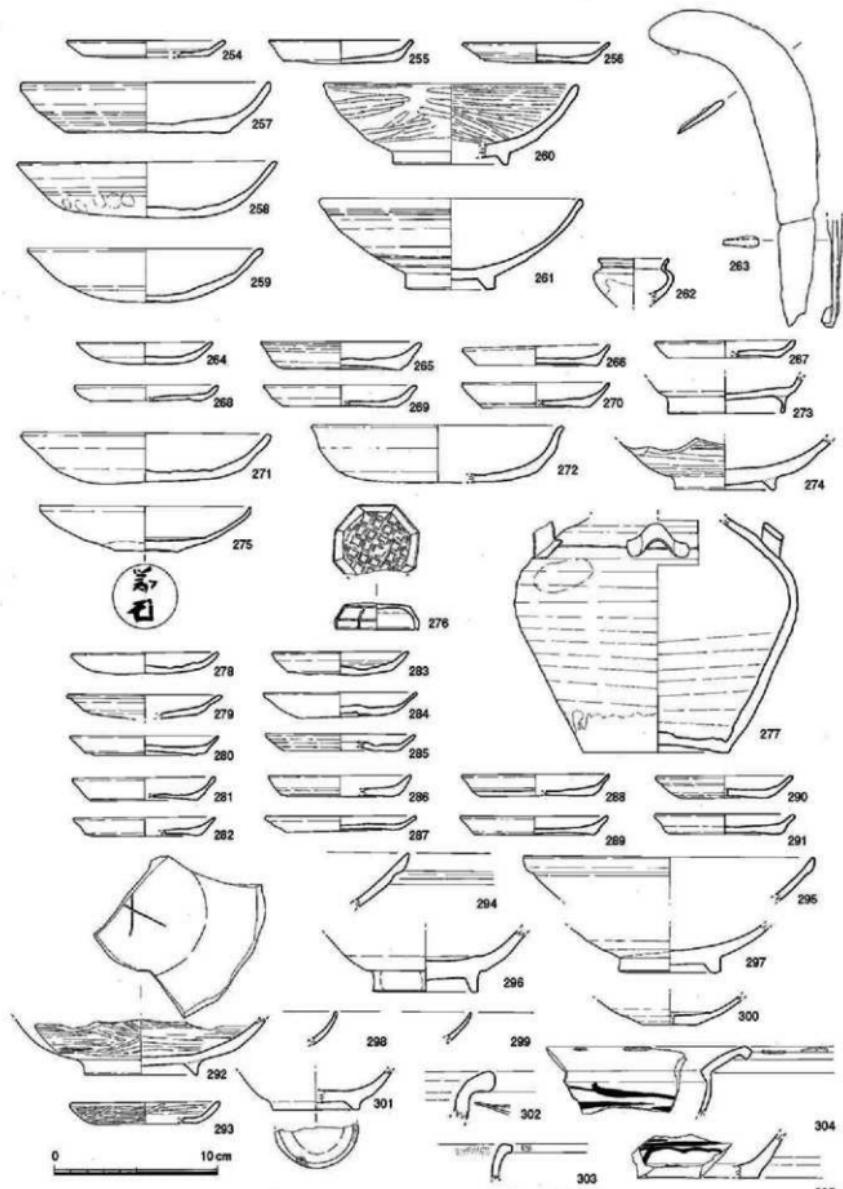
出土遺物(第23図)254～256は土師器の小皿である。口径8.8cm～9.8cm、器高1.1cm～1.5cmを測る。底部は254がヘラ切りで、255・256が糸切りで板状圧痕を有する。257～259は土師器の壊である。口径14.4cm～15.9cm、器高3.1cm～3.5cmを測る。257は底部は糸切りで板状圧痕を有する。258・259はヘラ切りで板状圧痕を有する。260は土師器の塊。復元口径15.6cm、器高5.0cmを測る。調整は内外面ともヘラミガキを施す。261は白磁碗II類。262は陶器の小壺。263は鉄製の鎌。全長19.4cm、身幅3.4cmを測る。



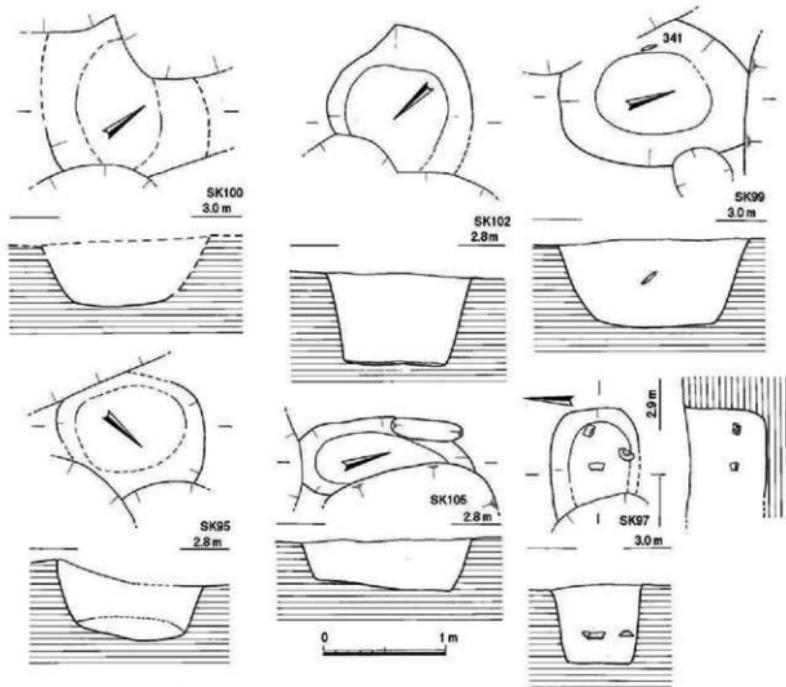
第21図 SK-73・76・80・81実測図 (1/40)



第22図 SK-73・76 出土遺物実測図 (1/3・1/4)



第23図 SK-80・81出土遺物実測図 (1/3)



第24図 SK-95・97・99・100・102・105 実測図 (1/40)

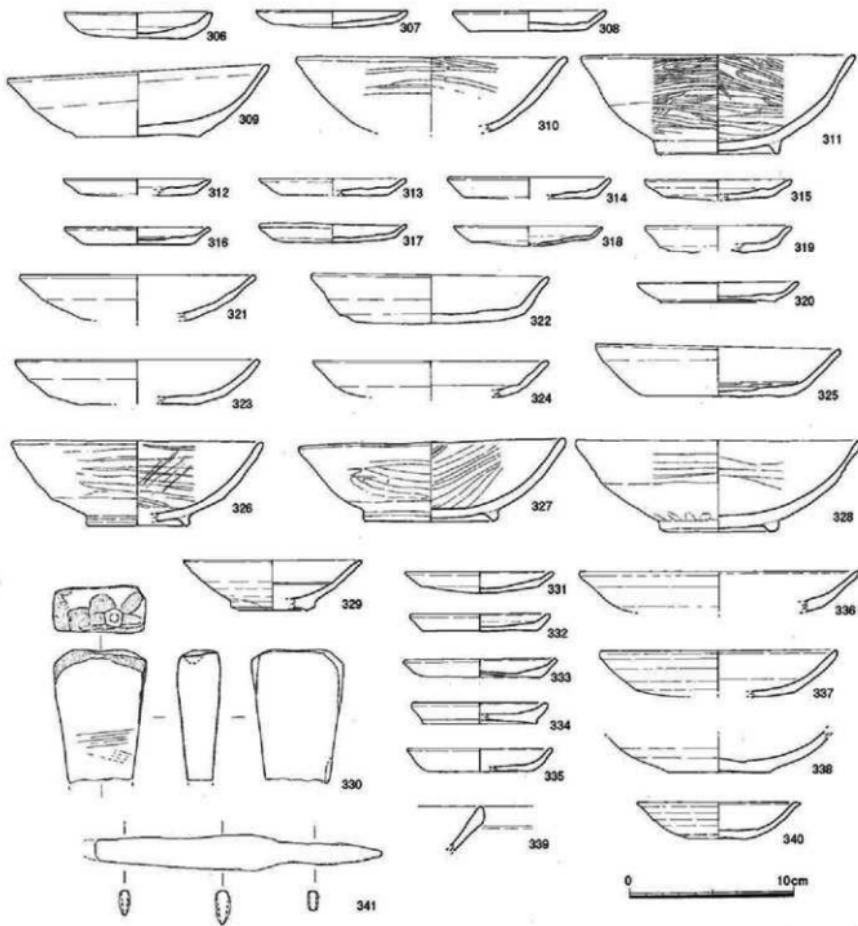
#### SK-81 (第21図)

調査区中央に位置し、SK-80を切る。当初SK-80と区別できず、東側を半裁し、断面で確認した段階で判別した。平面形は橢円形を呈する。長さ280cm、幅150cm程度、深さ73cmを測る。

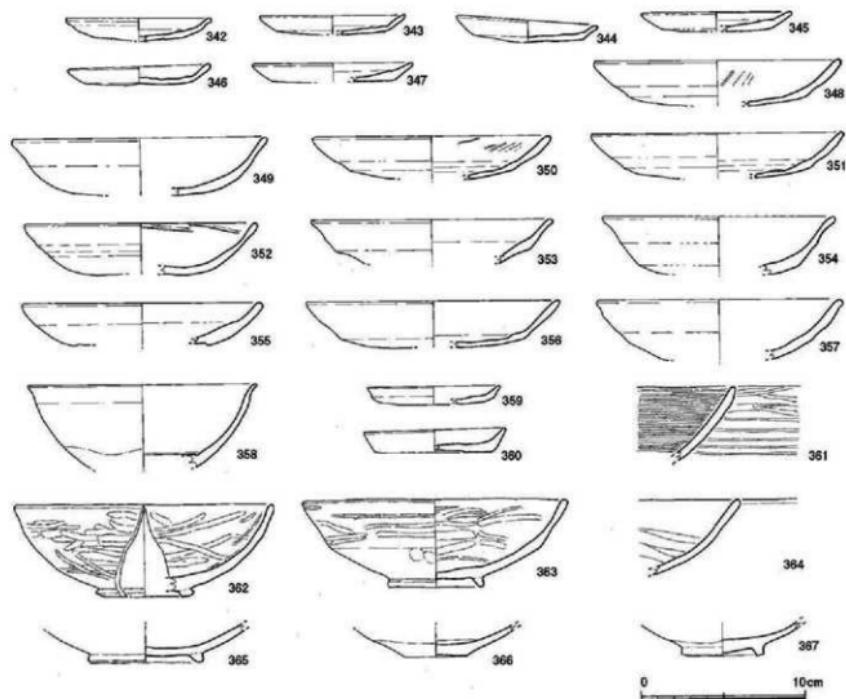
出土遺物(第23図)264～270は土師器の小皿である。口径8.4cm～10.0cm、器高1.0cm～1.7cmを測る。264の底部がヘラ切りで板状圧痕を有する。他は糸切りで265・266・270が板状圧痕を有する。271・272は土師器の壺である。それぞれ口径15.4cm、15.2cm、器高3.1cm、3.5cmを測る。271の底部がヘラ切りで板状圧痕を有する。272は糸切り。273・274は土師器壺。275は白磁皿VI-1b類。底部に墨書きを有する。276は合子の蓋。277は陶器の四耳壺。釉は暗オリーブ色を呈する。278～305はSK-80・81の帰属不明の上器である。278～291は土師器の小皿である。292は瓦器碗で内底部に「×」印のヘラ記号を有する。294～297は白磁碗。298～300は白磁皿。301は高麗青磁の皿。302は陶器壺。304・305は黄釉鉄絵文盤。同一個体か。

#### SK-95 (第24図)

調査区北東に位置し、SK-73に切られる。橢円形を呈し、長さ60cm、幅50cm程度、深さ40cmを測る。出土遺物(第25図)306～308は土師器の小皿である。口径9.1cm～9.4cm、器高1.2cm～1.3cmを測る。底部はヘラ切りで板状圧痕を有する。309は土師器の壺である。口径16.0cm、器高4.6cm



第25図 SK-95・97・99出土遺物実測図 (1/3)



第26図 SK-100・102出土遺物実測図(1/3)

を測る。底部は糸切り。310は土師器塊。復元口径16.6cmを測る。調整は内外面ともヘラミガキを施す。311は瓦器柄。口径17.0cm、器高6.1cmを測る。調整は内外面ともヘラミガキを施す。

#### SK-97 (第24図)

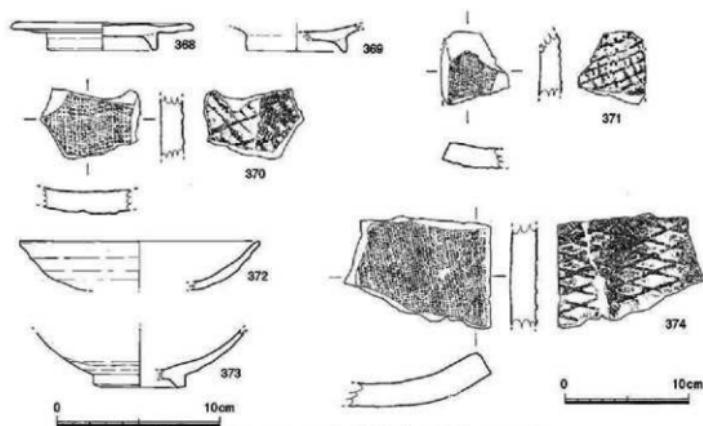
調査区北に位置し、西側を切られる。楕円形を呈し、幅75cm、深さ63cmを測る。

出土遺物(第25図)312～320は土師器の小皿である。口径9.0cm～10.0cm、器高1.0cm～1.7cmを測る。318は底部に穿孔する。312～319は底部はヘラ切りで314～317・319は板状圧痕を有する。320は糸切り。321～325は土師器の坏である。口径14.4cm～15.0cm、器高2.7cm～3.1cmを測る。321～324は底部はヘラ切りで322は板状圧痕を有する。325は糸切りで板状圧痕を有する。326～329は瓦器柄である。329は白磁皿II-1a類。330は砾石。

#### SK-99 (第24図)

調査区北東に位置し、SE-74に切られる。楕円形を呈し、長さ155cm以上、幅120cm、深さ67cmを測る。

出土遺物(第25図)331～335は土師器の小皿である。口径8.6cm～9.4cm、器高1.1cm～1.4cmを測る。331の底部がヘラ切りで板状圧痕を有する。他は糸切りで333・335が板状圧痕を有する。336～338は土師器の坏である。復元口径14.6cm～17.0cmを測る。底部は337がヘラ切り、338



第27図 SD-51・77出土遺物実測図 (1/3・1/4)

が糸切り。339は白磁碗IV類。340は白磁皿V-2a類。341は刀子。身幅2.1cmを測る。

#### SK-100 (第24図)

調査区東に位置し、SK-99に切られる。雨の影響で大半が壊れてしまった。楕円形を呈し、幅140cm程度、深さ60cm程度を測る。

出土遺物 (第26図) 342～347は土師器の小皿である。口径8.6cm～10.0cm、器高1.0cm～1.7cmを測る。底部はヘラ切りで342～344・346は板状圧痕を有する。348～357は土師器の壺である。復元口径14.2cm～15.8cmを測る。底部はヘラ切りで349・350・352・356は板状圧痕を有する。358は白磁碗。

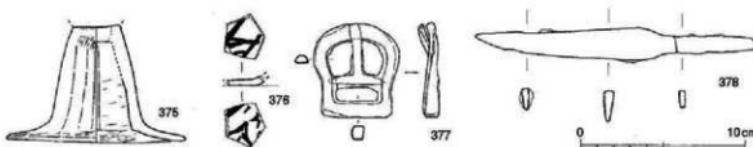
#### SK-102 (第24図)

調査区中央に位置し、SK-63に切られる。楕円形を呈し、幅120cm、深さ73cmを測る。

出土遺物 (第26図) 359・360は土師器の小皿である。それぞれ口径8.2cm、8.6cm、器高1.1cm、1.5cmを測る。底部は糸切りで360は板状圧痕を有する。361～364は瓦器椀。365は土師器壺。366・367は白磁皿。

#### SK-105 (第24図)

調査区北に位置し、攢乱に東側を切られる。楕円形を呈し、長さ139cm、幅60cm程度、深さ42cmを測る。遺物は土師器、白磁の細片が出土している。



第28図 その他の出土遺物実測図 (1/3)

### 3) 溝

#### SD-51 (第4図)

調査区南西部に位置し、南北方向に延びる。幅180cm前後、深さ15cmを測る。

出土遺物（第27図）368は高台付皿。口径11.4cm、器高1.8cmを測る。369は高台部。370・371は平瓦。370は粗い格子目叩き、371は細かい格子目叩きを施す。いずれも凹面には布目が残る。

#### SD-77 (第4図)

調査区北東部に位置し、東西方向に延びる。幅30cm前後、深さ20cmを測る。

出土遺物（第27図）372は土師器の壺。復元口径14.8cmを測る。373は白磁碗。374は平瓦。凸面は斜格子目叩きを施す。凹面には布目が残る。

### 4) その他の遺物（第28図）

375は高壺の脚部。376は土師器小皿で内外面に墨書がある。底部は糸切り。377は調査区南西端にかかるSK-1出土。鉄製の鉈具。他に底部ヘラ切り、糸切りの土師器が出土している。378は刀子。全長17.1cm、身幅1.8cmを測る。

## 5. 小結

今回の調査では井戸、土坑、溝が検出され、集落の一端を確認したと考えられるが、宮崎宮との関連については明らかにできなかった。遺構の時期は11～12世紀代で、この時期は遺跡が宮崎宮の南東側を中心として展開した前時代から、範囲を砂丘の東斜面に拡大していく時期にあたる。本地点は宮崎宮の北東に接するが、宮崎宮創建時の遺構はほとんど見られず、近くに位置する第12次調査に近い時間的傾向を示す。各遺構についてみてみると井戸は5基確認されたが、この内完掘出来た3基は井筒の木質が遺存するものではなく、その上部は土層の堆積状況から廃棄段階で抜かれたものと思われる。また、この段階で土師器の小皿、壺等が廃棄されている。土坑については土師器の小皿、壺等が完形で廃棄されたものが幾つか見られるのが特徴的である。遺物についてはSE-92をはじめ、多くの遺構から瓦が出土した。周辺に瓦屋根の建物が存在する可能性が考えられる。また古墳時代前期の土師器が少量出土したが、当該期の遺構は確認できなかった。最後に焼土、炭化物を含む整地層について触れておきたい。本調査においてもこの層は確認できたが、遺存状況が悪いこともありその時期を確定できなかった。少量ではあるが壁面から出土した土器を見ると土師器の底部は糸切りを主体とするが、ヘラ切りも少量含み、白磁のみで青磁は確認できなかった。この層については從来元寇に起因する可能性が推測されているが、本地点の整地層はそれ以前に形成された可能性も考えられる。

### III. 第41次調査

#### 1. 調査に至る経過

平成14年10月1日、三愛建物株式会社より福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課へ共同住宅建設に伴う福岡市東区箱崎3丁目2426他地内における埋蔵文化財の事前審査について依頼がなされた。これを受けて埋蔵文化財課では事業計画地が周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡に含まれることから試掘調査が必要であるとの判断がなされた。同年10月29日、試掘調査を行い、その結果、溝等の遺構が検出された。その後計画範囲が変更となり、面積が増大したため平成15年8月15日再度試掘を行った。この成果をもとに協議を重ねたが現状での設計変更は不可能との判断から記録保存のための発掘調査を行うこととなった。三愛建物株式会社と福岡市の間で埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、調査は平成15年9月16日より開始、平成15年12月11日に終了した。

最後になりましたが、三愛建物株式会社をはじめ関係者の方々には調査に際し、多大なご理解とご協力を頂いた。記して感謝いたします。

#### 2. 調査体制

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 文化財部長 山崎純男

埋蔵文化財課長 山口謙治 山崎純男（前任）

調査第2係長 池崎謙二 田中寿夫（前任）

事前審査 事前審査係長 浜石哲也 池崎謙二（前任）

主任文化財主事 吉留秀敏 米倉秀紀（前任）

事前審査係 久住猛夫

調査庶務 文化財整備課管理係 御手洗清

調査担当 調査第2係 中村啓太郎

調査員 上田龍児

発掘作業 小川秀雄 徳永栄彦 吹春哲男 宮崎雅秀 竹原吉秋 花田昌代 野田トヨ子

井上ヨシ子 田中フキ子 光安晶子 大庭智子 村崎祐子 藤澤義一 國田豊

上田龍児 渡辺誠 田端名恵子 中村幸子 花田則子 安藤史郎 阿部純子

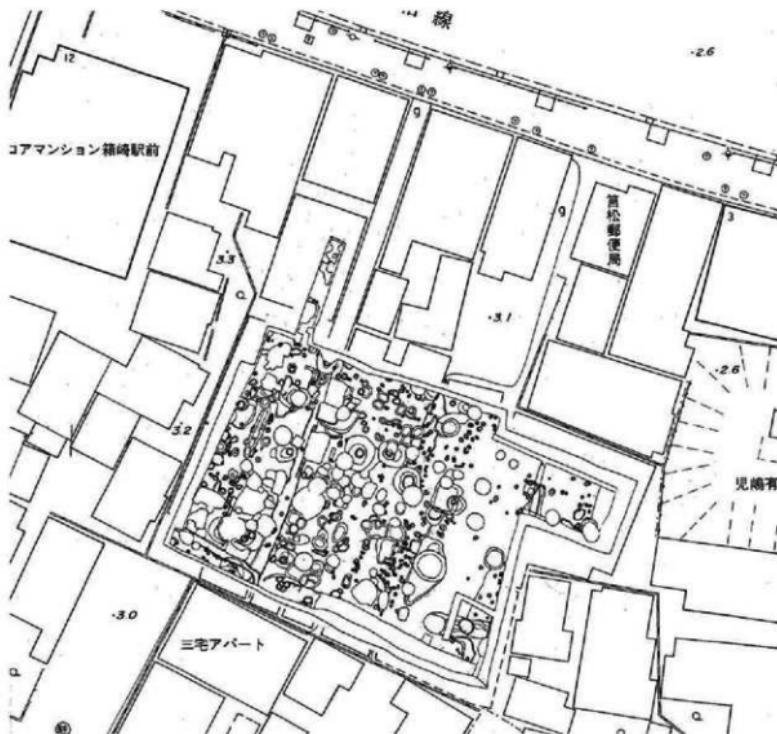
稻崎龍也 崎村雄介 永松弘恵

整理作業 林由紀子 下川奈津代 釜崎法子 原陽子 三栗野雅子

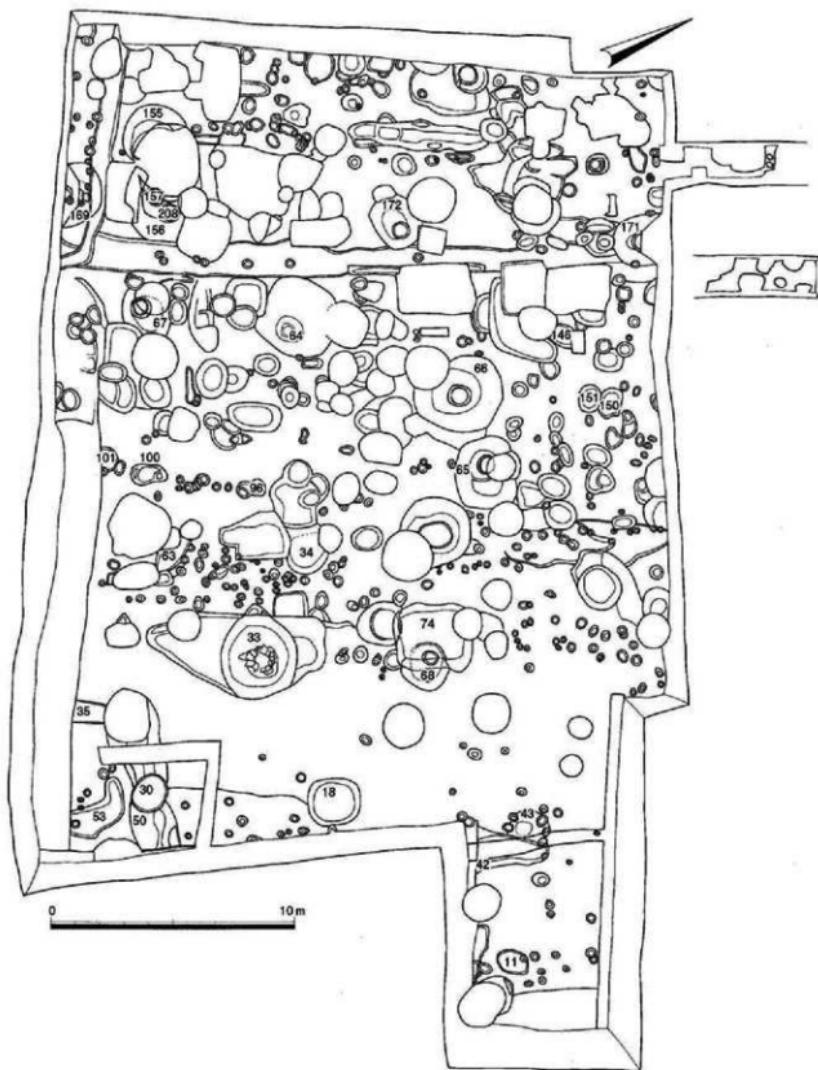
### 3. 調査概要

第41次調査区は東区箱崎3丁目2426他地内に所在し、遺跡の北東部に位置する。調査は先行して行われた杭打ち作業後、現物支給の重機による表土掘削から開始した。遺構面である黄褐色砂の上層10cm～20cm程から人力による掘削を行った。廃土処理の関係から調査区を東西に2分割し、東側から順に調査を行った。

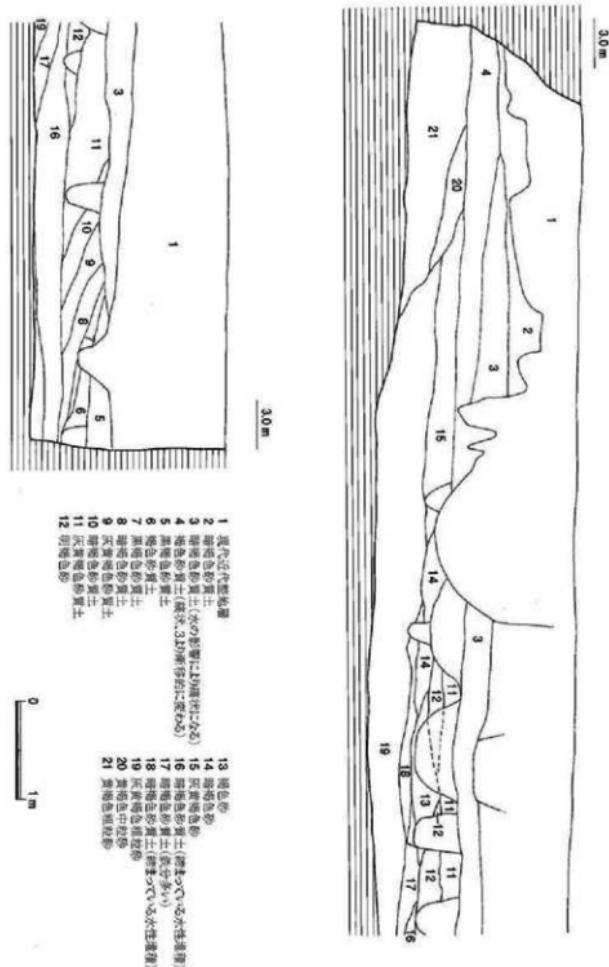
基本層序は現地表から第1層 現代近代整地層、第2層 暗褐色砂質土、第3層 暗褐色砂質土（繊状）、第4層 灰黄褐色砂、第5層 褐色砂、第6層 黄褐色砂となり、西から東に向かい傾斜する。検出面の標高は西で2.1m、東で1.5mを測る。検出した遺構は井戸、土坑、溝状遺構、土壤墓、木棺墓、柱穴等である。尚、調査区東部は遺構の密度が低くなり遺跡の際に近いものと考えられる。調査面積は1000.8m<sup>2</sup>を測る。



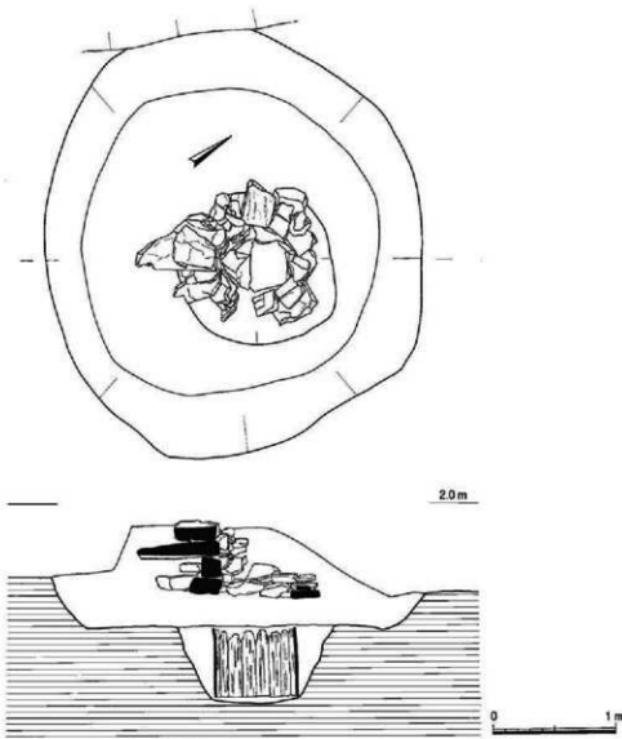
第29図 第41次調査区位置図 (1/500)



第30図 遺構配置図 (1/200)



第31図 北壁土層実測図 (1/50)



第32図 SE-33実測図 (1/40)

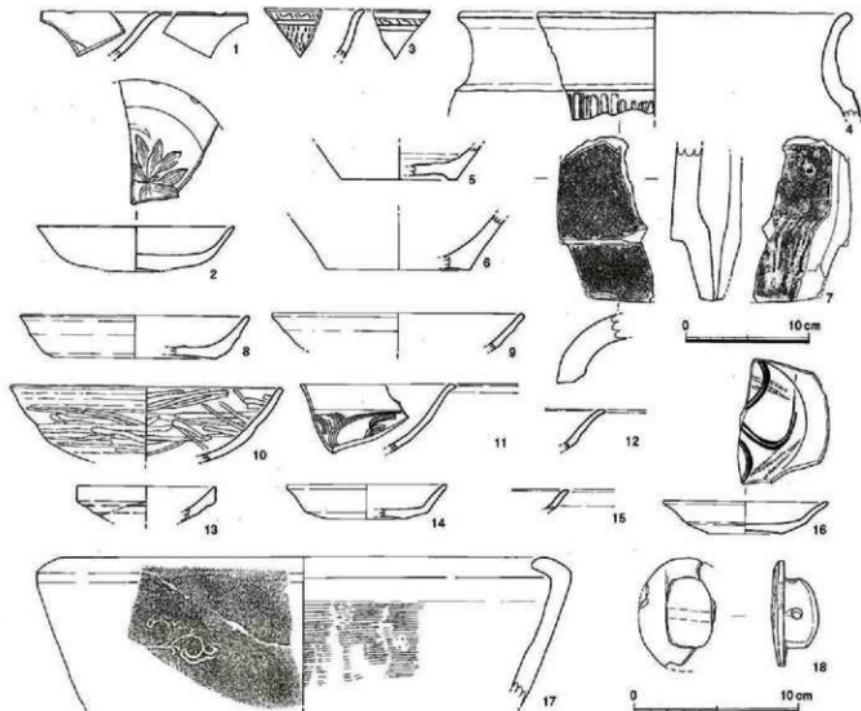
#### 4. 調査の記録

##### 1) 井戸

###### SE-33(第32図)

調査区東部に位置する。掘り方は円形を呈し、径300cm~350cm、深さ150cmを測る。中位に平坦面をつくり、さらに一段深く円形に径120cm、深さ60cm程掘削する。井筒は石組みで下部には径70cmの木桶を据える。廃棄時には径50cmの石が投棄されている。

出土遺物(第33図)1~6は掘り方出土。1は白磁碗。2は白磁皿VII-2b類。3は高麗青磁。4は土師器の甕。復元口径24.2cmを測る。5・6は陶器。7は丸瓦。8~18は他遺構の混入の可能性があるもの。



第33図 SE-33出土遺物実測図(1/3)

**SE-64 (第34図)**

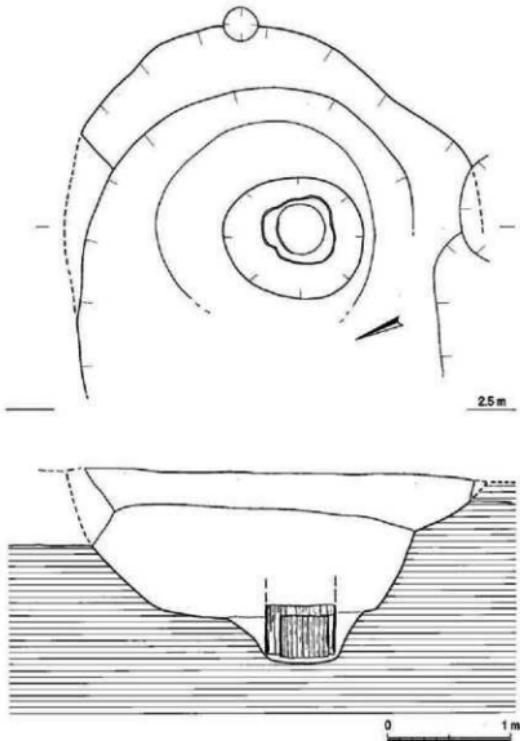
調査区中央やや西に位置する。掘り方は円形を呈し、径350cm、深さ160cmを測る。中位に平坦面をつくり、さらに一段深く円形に径100cm、深さ40cm程掘削する。井筒下部は木桶で2重確認された。外側が径60cm、内側が径40cmを測る。

出土遺物(第37図)19・20は土師器の小皿である。それぞれ復元口径8.1cm、9.0cm、器高1.1cm、0.9cmを測る。底部は糸切りで板状圧痕を有する。21は土師器の壺で復元口径14.2cmを測る。22は土師器の鍋か。23は白磁皿。24は同安窯系青磁碗I-1b類。25は龍泉窯系青磁皿。

**SE-65 (第35図)**

調査区中央に位置する。北側を先行して行われた杭打ちによって切られる。掘り方は不整な円形を呈し、東西方向で300cm、深さ160cmを測る。東側にテラスが付き、その下に平坦面をつくる。さらに一段深く円形に径75cm、深さ40cm程掘削する。井筒下部は木桶で径60cmを測る。

出土遺物(第37図)26は土師器の小皿。口径9.4cm、器高1.0cmを測る。底部は糸切りで板状圧痕を有する。27は土師器の壺。口径14.5cm、器高2.5cmを測る。底部は糸切りで板状圧痕を有する。28は龍泉窯系青磁碗。29は龍泉窯系青磁皿。30は白磁碗。31・32は陶器。32は鉢。33は土師器の



第34図 SE-64 実測図 (1/40)

小型壺。

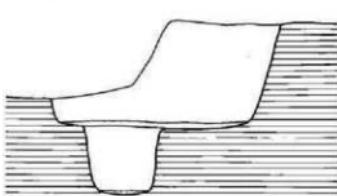
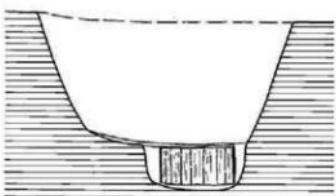
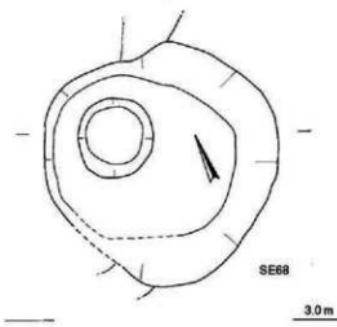
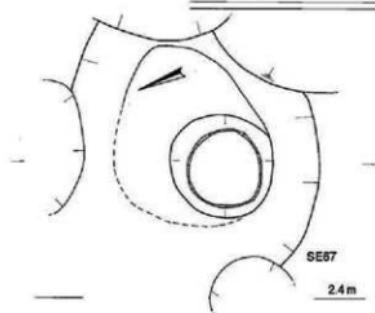
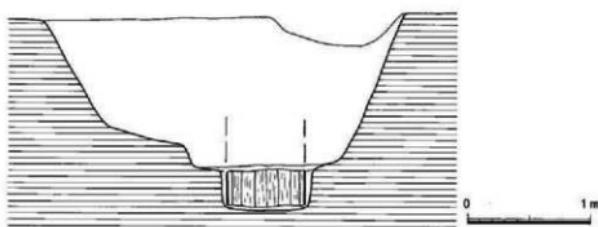
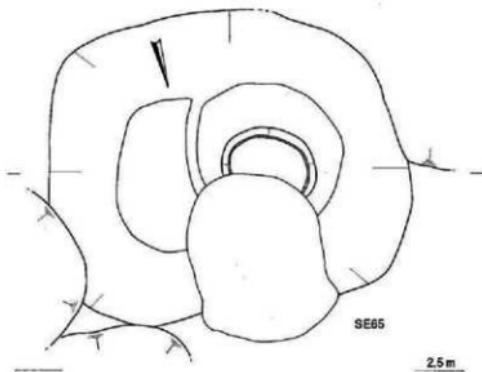
**SE-66 (第36図)**

調査区中央、SE-65 の西に位置する。西側を先行して行われた杭打ちによって切られる。掘り方は楕円形を呈し、南北方向で 370 cm、東西方向で 310 cm、深さ 190 cm を測る。下位に平坦面をつくり、さらに一段深く中央部に円形に径 90 cm、深さ 60 cm 程掘削する。井筒下部は木桶で径 65 cm を測る。出土遺物(第37図)34～36 は白磁碗。35・36 はV類。37 は同安窯系青磁Ⅲ。38 は同安窯系青磁碗。39・40 は龍泉窯系青磁碗。41 は薺壺である。42 は陶器の壺。復元口径 17.2 cm を測る。口縁部に目跡が残る。43 は滑石製品。石鍋の再加工か。

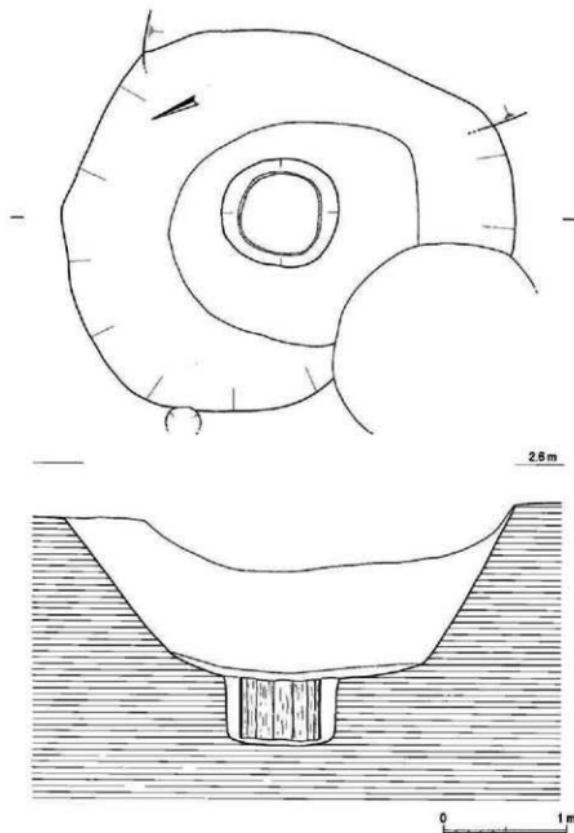
**SE-67 (第35図)**

SE-64 の南に位置する。三方を切られる。掘り方は楕円形を呈し、南北方向で 200 cm 程度、深さ 140 cm を測る。下位に平坦面をつくり、さらに一段深く西寄りに円形に径 80 cm、深さ 35 cm 程掘削する。井筒下部は木桶で径 60 cm を測る。

出土遺物(第37図)44 は瓦器椀。内外面共にヘラミガキを施す。45 は白磁碗V類。



第35図 SE-65・67・68実測図 (1/40)



第36図 SE-66実測図(1/40)

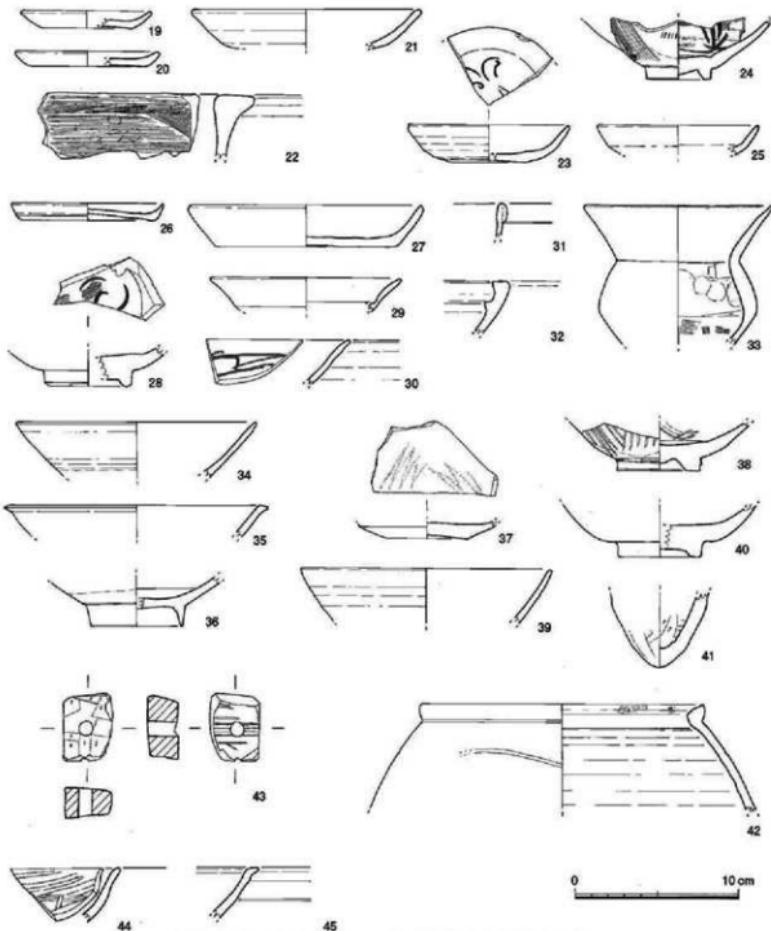
**SE-68 (第35図)**

SE-33の北に位置する。西側をSK-74に切られる。掘り方は円形を呈し、径200cm、深さ140cmを測る。下位に平坦面をつくり、さらに一段深く西寄りに円形に径60cm、深さ60cm程掘削する。井筒は確認されなかった。遺物は土師器、瓦器、陶器の細片が出土している。

**SE-155 (第38図)**

調査区南西に位置する。東側を近世の井戸に切られる。掘り方は円形を呈するとおもわれる。南北方向で長さ270cm、深さ170cmを測る。

出土遺物(第40図)46・47は土師器の小皿。それぞれ復元口径9.1cm、11.2cm、器高1.0cmを測る。底部はヘラ切りで板状圧痕を有する。他に瓦器、白磁、瓦の細片が出土している。

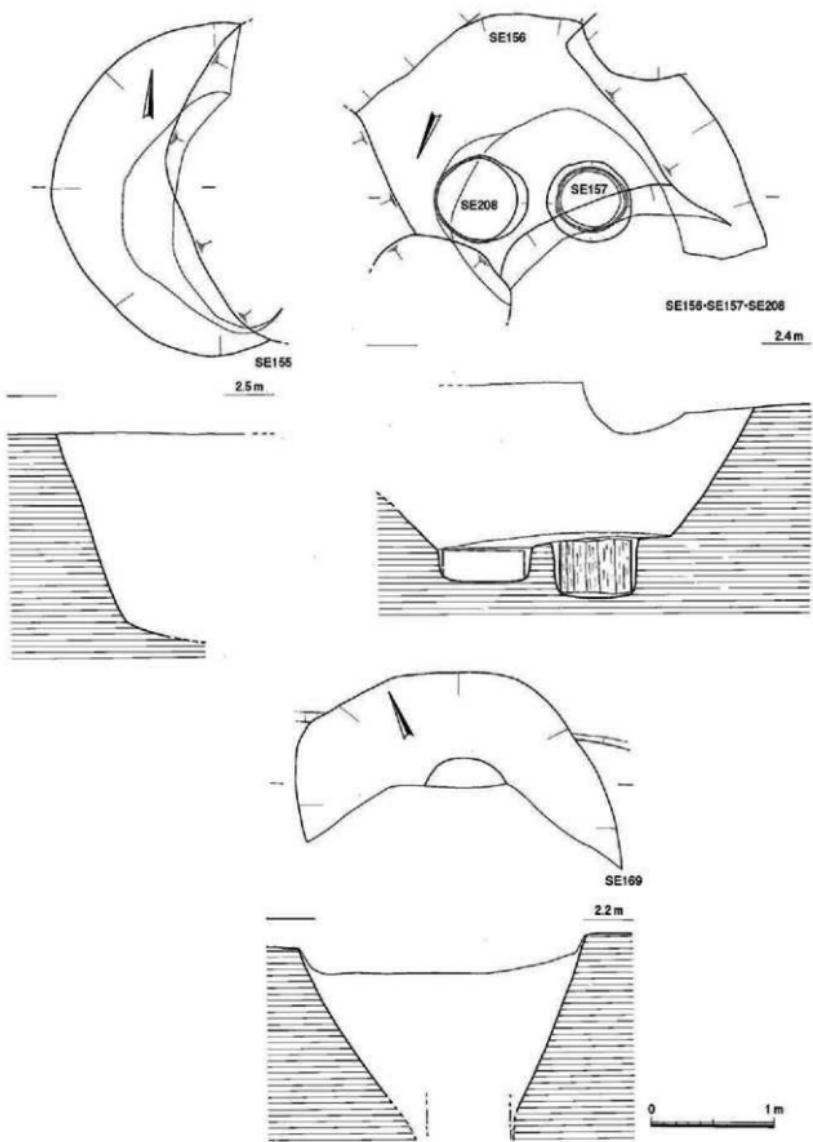


第37図 SE-64・65・66・67出土遺物実測図 (1/3)

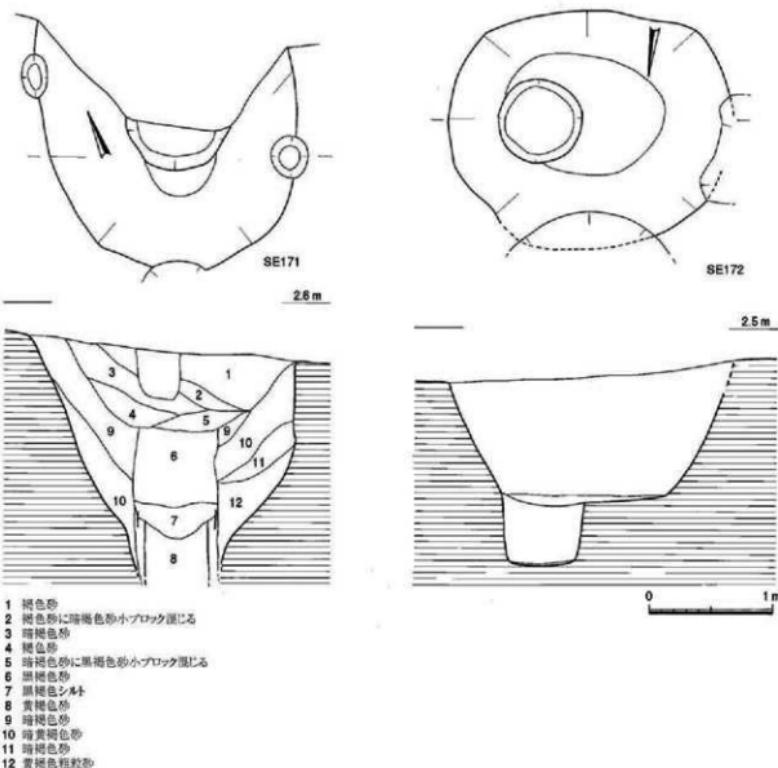
#### SE-156 (第38図)

調査区南西に位置する。西側を近世の井戸に切られる。SE-208を切ると考えられる。掘り方は円形を呈するとおもわれる。下位に平坦面をつくり、さらに一段深く円形に径70cm、深さ50cm程掘削する。井筒下部は木桶で径60cmを測る。

出土遺物(第40図)48は土師器の小皿。復元口径8.0cm、器高0.8cmを測る。底部は糸切りで板状圧痕を有する。49は白磁皿類。50は越州窯系青磁碗。底部内外に目跡が残る。51は青磁皿。52は須恵質の鉢。53は土鍤。



第38図 SE-155・156・157・169・208実測図 (1/40)



第39図 SE-171・172実測図(1/40)

#### SE-157(第38図)

調査区南西に位置する。大半を近世の井戸に切られ、SE-156を切る。掘り方は円形を呈するとおもわれる。

出土遺物(第40図)54は白磁皿。他に底部糸切りの土師器、同安窯系青磁の細片が出土している。

#### SE-169(第38図)

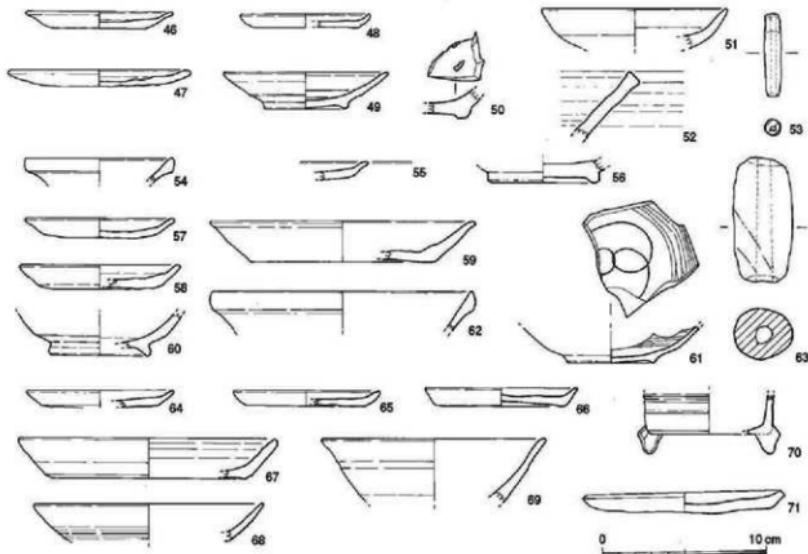
調査区南西に位置する。南側は調査区の壁にかかるため完掘出来なかった。掘り方は円形を呈するとおもわれる。東西方向で長さ220cmを測る。

出土遺物(第40図)55は底部ヘラ切りの土師器の小皿。56は白磁碗。

#### SE-171(第39図)

調査区北西に位置する。北側は調査区の壁にかかるため完掘出来なかった。掘り方は円形を呈するとおもわれる。東西方向で長さ210cmを測る。

出土遺物(第40図)57・58は土師器の小皿。それぞれ復元口径9.2cm、10.0cm、器高1.2cm、1.5



第40図 SE-155・156・157・169・171・172・208出土遺物実測図(1/3)

cmを測る。底部は57がヘラ切り、58が糸切りでいずれも板状圧痕を有する。59は土師器の壺。復元口径16.4cm、器高2.5cmを測る。底部は糸切り。60は土師器壺。61は瓦器椀。見込みに輪状のヘラミガキを施す。62は白磁の碗。63は土鍾。

#### SE-172(第39図)

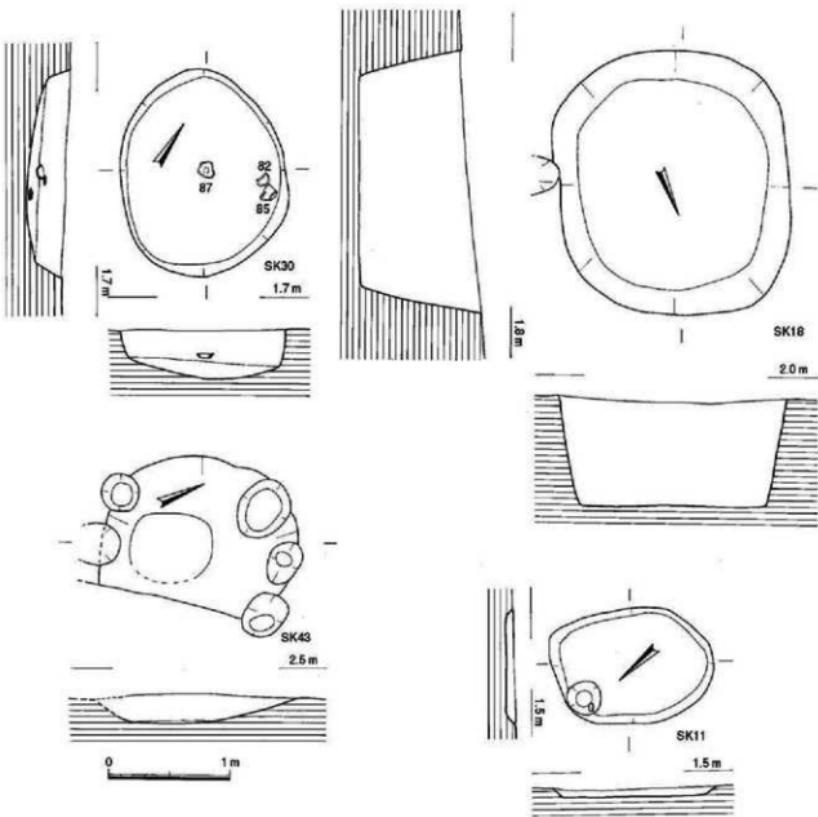
調査区西に位置する。掘り方は楕円形を呈し、東西方向で230cm、南北方向で200cm程度、深さ165cmを測る。下位に平坦面をつくり、さらに一段深く東側に円形に径65cm、深さ60cm程掘削する。井筒は確認されなかった。

出土遺物(第40図)64~66は土師器の小皿。口径9.1cm~9.4cm、器高1.0cm~1.2cmを測る。底部は糸切りで65は板状圧痕を有する。67~68は土師器の壺。それぞれ復元口径15.8cm、14.2cm、器高2.4cmを測る。67の底部は糸切り。69は龍泉窯系青磁碗。70は土師器の香炉。橙色を呈し、体部はナデを施す。脚は3足か。

#### SE-208(第38図)

調査区南西に位置する。西側を近世の井戸に切られる。SE-156に切られると考えられる。検出段階ではSE-156との区別がついておらず、SE-156の井筒を検出した段階でSE-208を確認できた。このため掘り方の遺物はほとんど確認できていない。掘り方は円形を呈するとおもわれる。すり鉢状に掘削し、さらに一段深く円形に径80cm、深さ30cm程掘削する。井筒の痕跡が確認された。径65cmを測る。

出土遺物(第40図)71は土師器の皿。口径12.3cm、器高1.1cmを測る。底部は糸切りで板状圧痕を有する。



第41図 SK-11・18・30・43実測図 (1/40)

## 2) 土坑

### SK-11 (第41図)

調査区東部端に位置する。不整な梢円形を呈し、長さ 130 cm、幅 96 cm、深さ 7 cmを測る。遺物は底部糸切りの土師器、瓦器、白磁等が出土している。

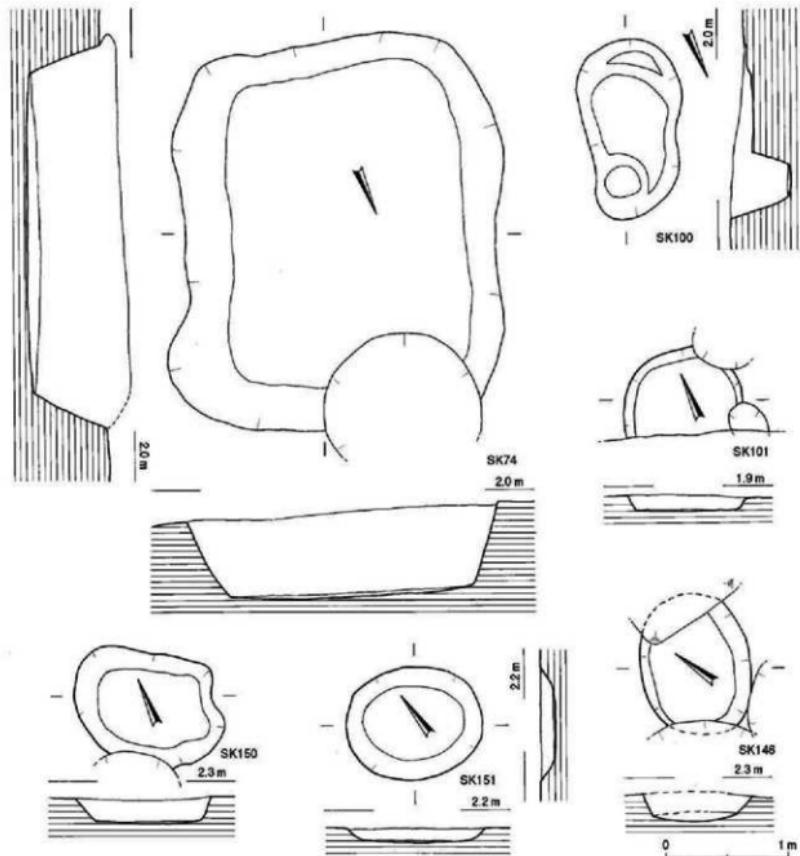
### SK-18 (第41図)

調査区東部に位置する。梢円形を呈し、長さ 220 cm、幅 189 cm、深さ 55 cmを測る。

出土遺物(第43図) 72 は瓦器椀。73 は白磁碗V類。74・75 は青磁碗。74 は同安窯系I類。

### SK-30 (第41図)

調査区東南端に位置し、SD-50を切る。梢円形を呈し、長さ 169 cm、幅 135 cm、深さ 37 cmを測る。出土遺物(第43図) 77～82 は土師器の小皿である。口径 8.7 cm～10.2 cm、器高 0.9 cm～1.8 cmを測る。77・78・80 の底部がへラ切りで板状圧痕を有する。他は糸切りで板状圧痕を有する。83・84 は土

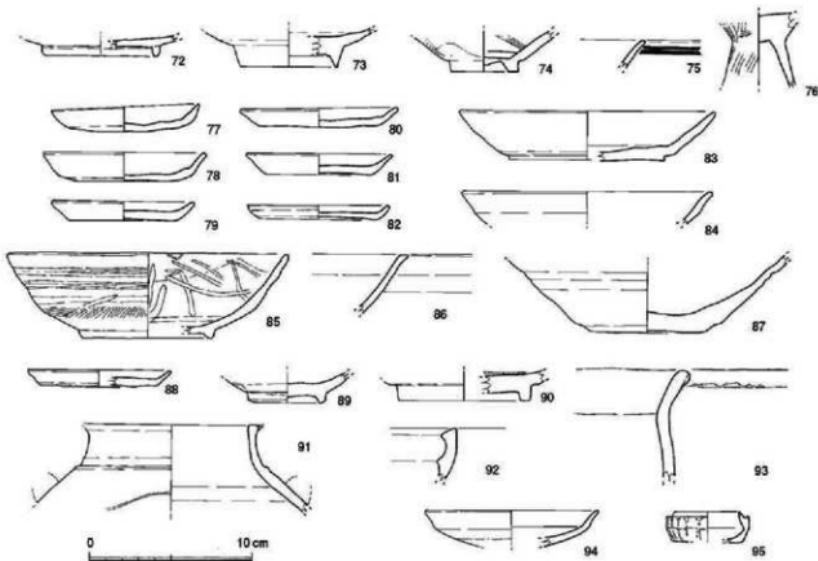


第42図 SK-74・100・101・146・150・151実測図 (1/40)

器器の坏。それぞれ復元口径 15.6 cm、15.4 cm、器高 3.0 cm を測る。84 の底部は糸切り。85 は瓦器柄。復元口径 17.4 cm、器高 5.3 cm を測る。調整は内外面共にヘラミガキを施す。外面屈曲部にはハケ目が残る。86 は白磁碗 V類。87 は土師質の鍋。外面に煤が付着する。

#### SK-43 (第41図)

調査区東部に位置する。梢円形を呈し、長さ 150 cm、幅 120 cm 以上、深さ 26 cm を測る。  
出土遺物 (第43図) 88 は土師器の小皿。復元口径 9.0 cm、器高 1.0 cm を測る。底部は糸切りで板状圧痕を有する。89 は白磁碗 VII類。90 は青磁。見込みに目跡が残る。91 は陶器の耳壺。釉は灰白色を呈する。92 は陶器鉢。93 は土師器甕。



第43図 SK-18・30・43出土遺物実測図(1/3)

#### SK-74 (第43図)

調査区東部に位置し、SE-68を切る。隅丸長方形を呈し、長さ318cm、幅260cm、深さ90cmを測る。出土遺物(第42図)94は龍泉窯系青磁皿。95は青白磁の合子の身。体部下半から底部は施釉されない。

#### SK-100 (第42図)

調査区南部に位置する。梢円形を呈し、長さ148cm、幅75cm、深さ53cmを測る。南側にテラスが付き、北側が1段深くなる。遺物は土師器の細片が出土している。

#### SK-101 (第42図)

調査区南部に位置し、南側が調査区外に延びる。平面形は円形か。幅100cm、深さ13cmを測る。遺物は瓦器の細片が出土している。

#### SK-146 (第42図)

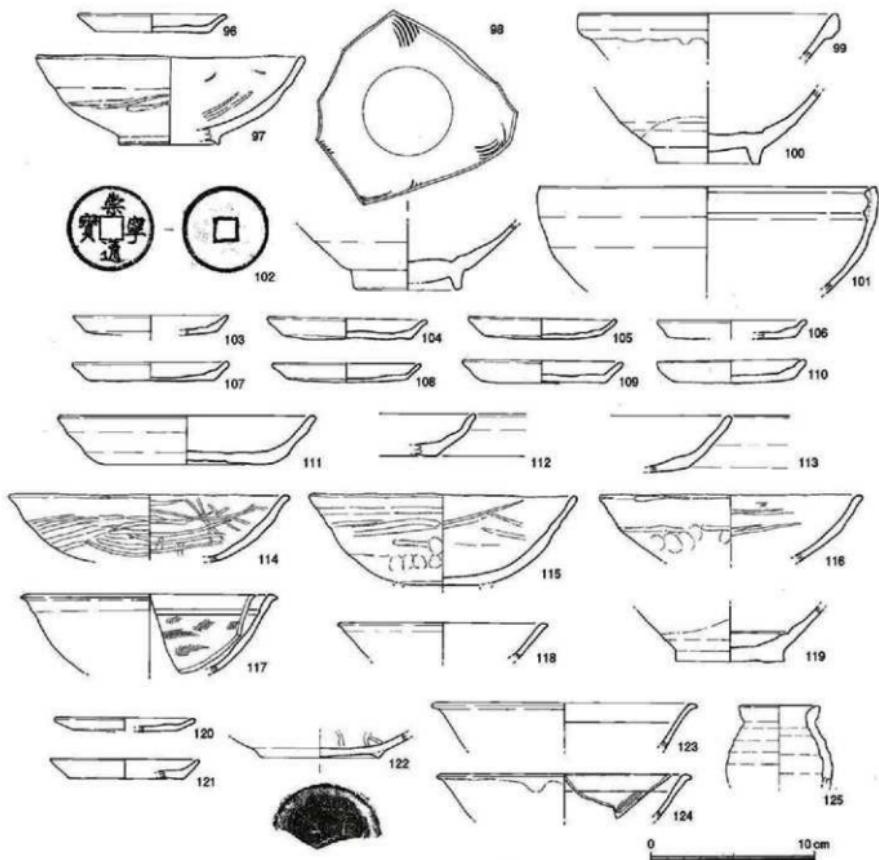
調査区北部に位置する。梢円形を呈し、長さ100cm以上、幅90cm、深さ33cmを測る。遺物は土師器、白磁の細片が出土している。

#### SK-150 (第42図)

調査区北部に位置し、SK-151に切られる。不整な梢円形を呈し、長さ130cm、幅87cm、深さ19cmを測る。遺物は土師器、陶器の細片が出土している。

#### SK-151 (第42図)

調査区北部に位置し、SK-150を切る。梢円形を呈し、長さ116cm、幅92cm、深さ13cmを測る。遺物は土師器、白磁、陶器の細片が出土している。



第44図 SD-42・50・53出土遺物実測図（1/3）

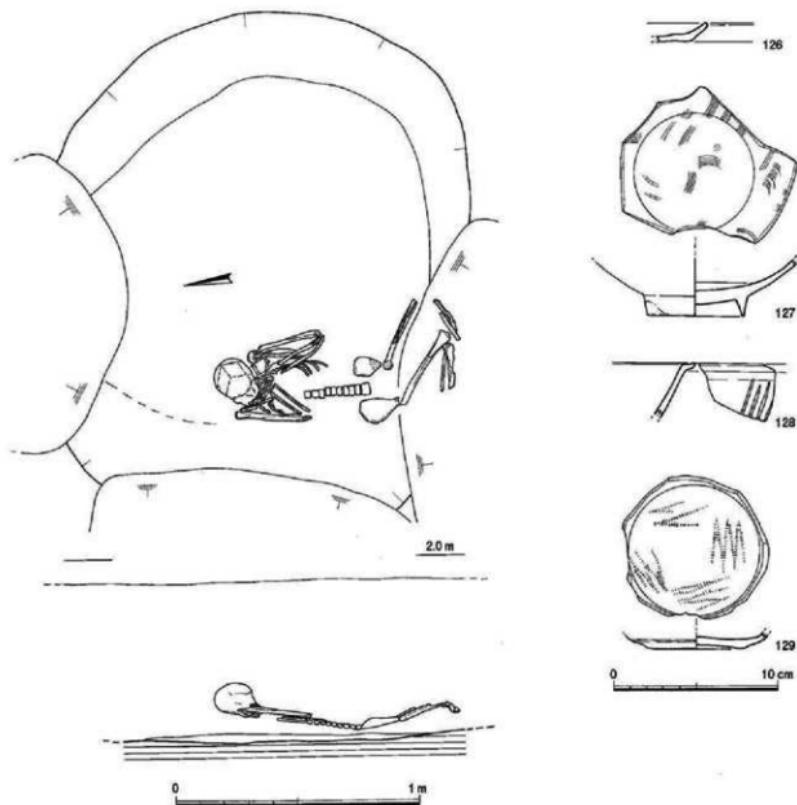
### 3) 溝

大半の溝及び溝状遺構は調査区東部の包含層上層で検出された。

#### SD-42（第30図）

調査区北東に位置し、南北方向に延びる。上部を後世の溝に切られる。幅190cm前後、深さ35cmを測る。

出土遺物（第44図）96は土師器の小皿。復元口径9.3cm、器高1.1cmを測る。底部は糸切り。97は瓦器輪。復元口径16.4cm、器高5.5cmを測る。調整は内外面共にヘラミガキを施す。下半は未調整。98～100は白磁碗。99がIV類、100がV類。101は陶器の鉢。復元口径20.6cmを測る。灰黄褐色



第45図 SK-34実測図(1/20)および出土遺物実測図(1/3)

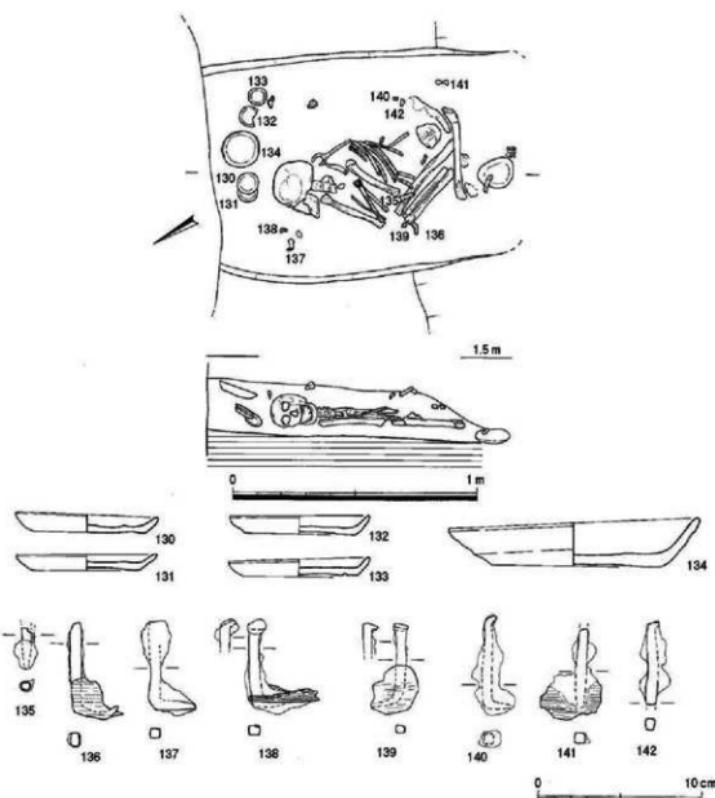
を呈する。102は銅鏡で「崇寧通寶」(初鋤1102年)である。

#### SD-50(第30図)

調査区南東に位置し、東西方向に延びる溝状遺構。SK-30に切られる。幅210cm、深さ52cmを測る。出土遺物(第44図)103~110は土師器の小皿である。口径9.0cm~9.9cm、器高1.1cm~1.5cmを測る。底部は103~105・107がヘラ切りで板状圧痕を有する。他が糸切りで板状圧痕を有する。111~113は土師器の环。111は復元口径15.8cm、器高3.0cmを測る。底部はヘラ切りで板状圧痕を有する。113の底部は糸切り。114~116は瓦器椀。復元口径16.0cm~17.2cmを測る。調整は内外面共にヘラミガキを施す。117~119は白磁碗。117がV類、119がIV類。

#### SD-53(第30図)

調査区南東、SD-50の南に位置する溝状遺構。幅140cm前後、深さ28cmを測る。



第46図 SK-35 実測図(1/20)および出土遺物実測図(1/3)

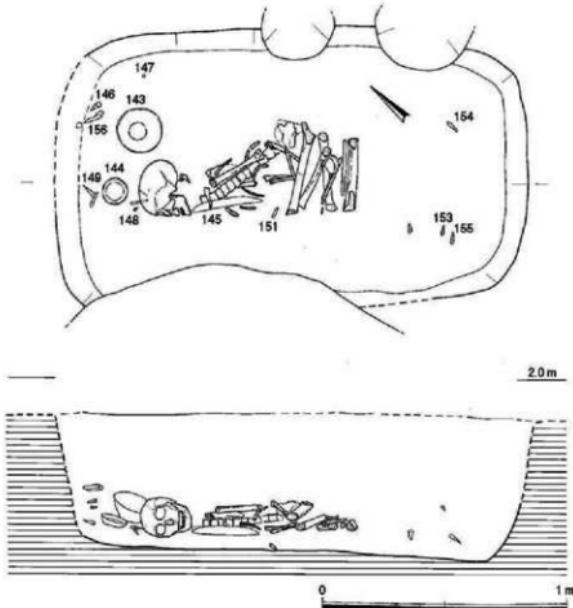
出土遺物(第44図)120・121は土器類の小皿である。それぞれ復元口径8.6cm、9.2cm、器高0.8cm、1.2cmを測る。底部は120がヘラ切りで板状圧痕を有する。121が糸切り。122は瓦器椀。底部にヘラ記号を有する。123・124は白磁碗V類。125は青磁壺。

#### 4) 土塚墓・木棺墓

土塚墓1基、木棺墓2基を検出した。いずれも東南部に位置し、人骨は全身が確認できる状態で遺存していた。また、東部包含層から人骨片が出土しており、他にも幾つかの墓が存在していたものと考えられる。

#### SK-34(第45図)

調査区南東に位置する土塚墓である。三方及び上部を擾乱坑に切られる。このため検出時には遺構であることが分からず、人骨を検出した時点で遺構であることを確認した。図示している墓壙掘り方



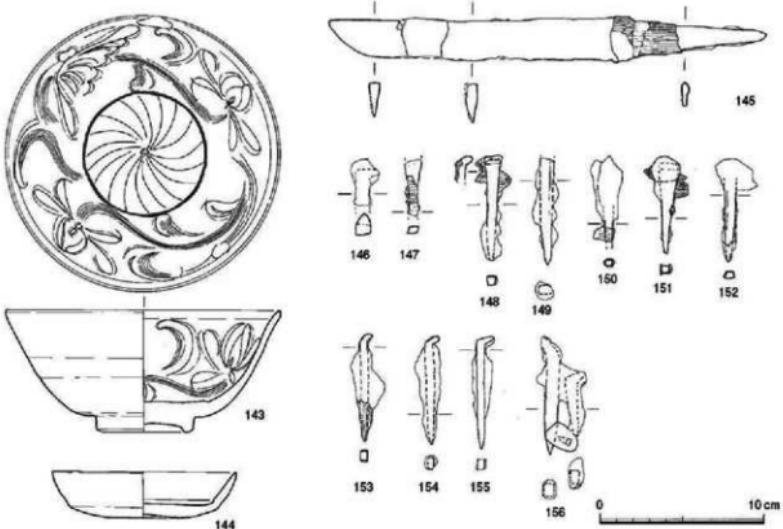
第47図 SK-63実測図(1/20)

東側については別の造構の可能性がある。墓壇は本来、隅丸長方形を呈するものとおもわれる。現状で深さ 68 cm を測る。埋葬された人骨は熟年の女性と推定され、ほぼ全身が遺存する。顔面が土圧により陥没している。頭位方向を北にとり、N - 9° - E を測る。顔は東を向き手を重ね、仰臥屈葬される。出土遺物(第45図)すべて埋土中からの出土で副葬品と認定できるものはない。126は土師器の小皿。底部は糸切りで板状圧痕を有する。127は白磁碗V類である。128は同安窯系青磁碗皿類。129は同安窯系青磁皿。

#### SK-35(第46図)

調査区南東に位置する木棺墓である。北側を先行して行われた杭打ちによって、南側を溝によって切られる。墓壇は長方形を呈するものとおもわれる。幅 94 cm、現状で深さ 22 cm を測る。木棺は釘の位置より幅 50 cm 程度と考えられる。また足下には 15 cm 程度の扁平な石が配置されていた。木棺の置台であろうか。埋葬された人骨は熟年の男性と推定され、ほぼ全身が遺存する。左側頭部は土圧により陥没している。頭位方向を北にとり、N - 30° - E を測る。西を向き側臥屈葬される。頭部上に土師器の壺、小皿が副葬されていた。

出土遺物(第46図)130～133は土師器の小皿。口径 8.6 cm～8.8 cm、器高 1.0 cm～1.2 cm を測る。底部はすべて糸切りで板状圧痕を有する。134は土師器の壺。口径 15.4 cm、器高 3.1 cm を測る。底部は糸切りで板状圧痕を有する。135～142は木棺の釘である。断面は方形を呈し、頭部を折り曲げる。長さ 7 cm 前後を測る。大半に棺の木質が残り、屈曲する。



第48図 SK-63出土遺物実測図(1/3)

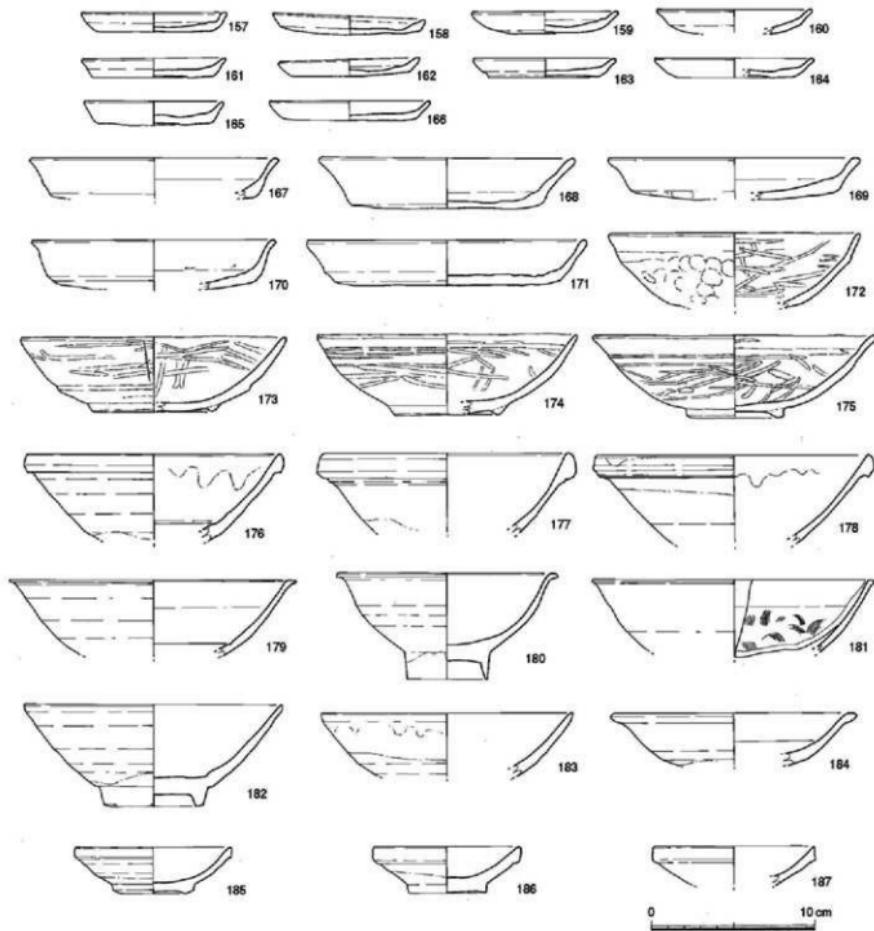
#### SK-63(第47図)

調査区南東、SK-34の南に位置する木棺墓である。南西側を先行して行われた杭打ちによって、両小口部も搅乱坑によって切られる。墓壁は長方形を呈し、長さ195cm前後、幅115cm前後、深さ55cmを測る。木棺は釘の位置より長さ150cm、幅50cm程度と考えられる。埋葬された人骨は熟年の男性と推定され、ほぼ全身が遺存する。頭位方向を北西にとり、N-43°-Wを測る。北西を向き側臥屈葬される。頭部上に青磁の碗、皿、胸部に短刀が副葬されていた。12世紀中頃から後半のものと考えられる。

出土遺物(第48図)143は龍泉窯系青磁碗I-2類で、口径17.0cm、器高7.4cmを測る。内面に草花文を有し、釉は灰オリーブ色を呈する。144は皿。口径11.7cm、器高2.8cmを測る。釉はオリーブ黄色を呈する。145は短刀。全長26.7cm、身幅2.4cmを測る。柄部、刀身部に一部木質が残る。146~156は木棺の釘である。断面は方形を呈し、頭部を折り曲げる。長さ6~7cmを測る。一部に棺の木質が残る。

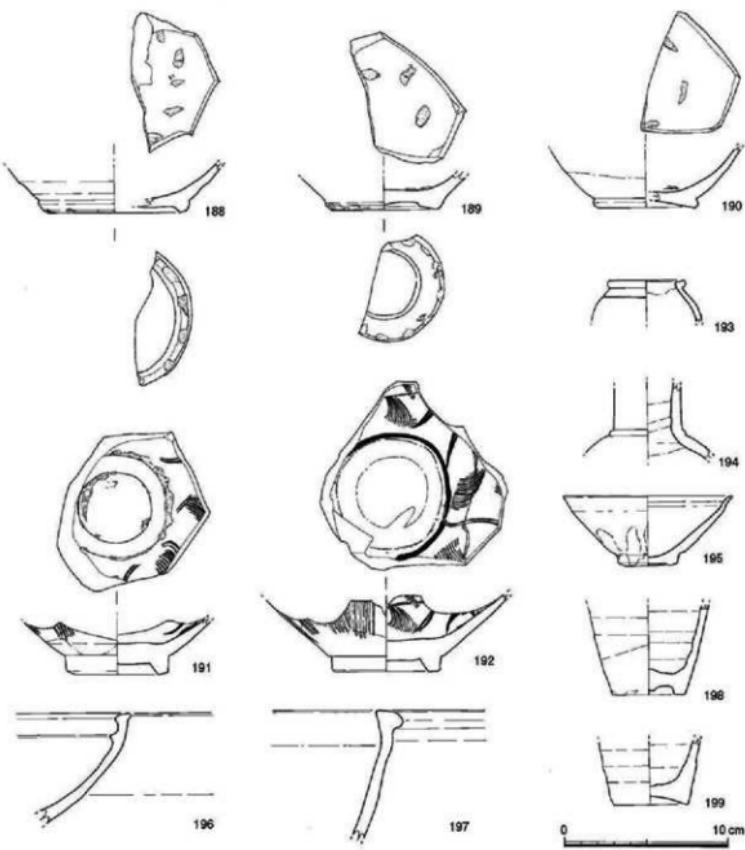
#### 5) その他の出土遺物

東部包含層出土遺物(第49・50図)北東部の砂丘際を覆う包含層の出土遺物である。掲載した土器類の他に獸骨の出土が目立つ。これについては付論として屋山氏の調査報告を掲載している。157~166は土師器の小皿。口径8.6cm~9.8cm、器高1.2cm~1.5cmを測る。底部は157~160がヘラ切りで板状圧痕を有する。他が糸切りで161~165以外は板状圧痕を有する。167~171は土師器の坪。口径15.2cm~17.2cm、器高2.8cm~3.3cmを測る。底部はヘラ切りで板状圧痕を有す



第49図 東側包含層出土遺物実測図（1/3）

る。172は黒色土器B類の碗。復元口径15.4cmを測る。調整は外面に指頭圧痕が残り、内面はヘラミガキを施す。173～175は瓦器碗。復元口径16.0cm～17.2cm、器高4.6cm～5.1cmを測る。調整は内外面共にヘラミガキを施す。176～184は白磁碗。185～187は白磁皿II-1b類。188～



第50図 東側包含層出土遺物実測図（1/3）

190は越州窯系青磁碗。188・189は全面に施釉し、灰オリーブ色を呈する。底部内外に目跡が残る。190は釉はオリーブ黄色を呈し、体部下半から高台部は施釉されない。見込みに目跡が残る。191・192は同安窯系青磁碗II-2類。外面に粗い柳目文、内面に花文を有し、見込みの釉を輪状に掻き取る。目跡が残る。193は青磁壺。194は青磁の水注。釉はオリーブ黄色を呈する。195は天目碗。厚く施釉され褐色を呈する。196・197は陶器鉢。196は内面に施釉され、オリーブ黄色を呈する。197は外面に薄く施釉され灰褐色を呈する。198・199は陶器壺。

## 5. 小結

本調査区は遺跡の北東限に近く、砂丘の東部際に位置する。このため全体的に遺構は少なく、特に東側の密度は低い。

検出した遺構は井戸、土坑、溝、埋葬遺構（土壙墓、木棺墓）等である。また東部の砂丘際を確認した。この砂丘際の東斜面を覆う包含層から土器類に加え、牛、馬、イノシシ等の獸骨が出土した。これらの中には解体痕を有するものがあり、本地点が斜面を利用した廐棗場所であったと考えられる。この斜面が最終的に埋没するのが概ね12世紀中頃から後半頃で、これとほぼ同時期に木棺墓等の埋葬遺構、井戸、土坑等の生活遺構が出現する。この時期は箱崎遺跡が本格的に範囲を拡大していく時期にあたり、本調査区はその最先端部であろう。埋葬遺構は3基確認した。いずれも東部の近接した地点に位置する。頭位方向、埋葬姿勢に統一性は見られず、これまでの調査事例や博多遺跡群と同様の傾向を示す。また東部包含層より獸骨に混じり、少量の人骨が確認された。本調査区の北部に位置する第10次調査においても東斜面において3体以上の人骨片を確認している。埋葬施設から流入したものか、あるいは土坑や木棺等の施設を持たず、斜面に埋葬されたものであろうか。遺構の数は少ないが墓域を形成していた可能性が考えられる。

13世紀以降、遺構は極端に減少し、中世後期と考えられるSE-33が存在する他はほとんど見られない。また西側で見られる元寇に起因すると推測されている焼土層・炭化物を多量に含む整地層は確認されず、13世紀後半には集落としての機能は失われていたと考えられる。これ以降、再び遺構が増加するのは近世後半からである。こうした状況は第10次調査と同様である。13～14世紀にかけては前代と同様、ほぼ遺跡の全域に遺構が分布するが、主体は西側に移ることが推定されている。（注1）本地点はその先駆け的傾向を示すものであろうか。

尚、遺物としては古墳時代前期の土師器が出土したが、当該期の遺構は確認されなかった。

注1 榎本義嗣「福岡市所在の箱崎遺跡について」中世都市研究会2003九州大会資料集

## 付論 1

### 箱崎遺跡第41次調査出土の中世人骨

岡崎健治・中橋孝博

九州大学大学院比較社会文化学府

#### はじめに

博多を中心とした玄界灘沿岸地域は、古くは弥生時代から現代に至るまで、国内外をつなぐ港町としての歴史をもっており、そこに生活した人々がどのような形質変化を遂げてきたかを明らかにすることは、人類学的にも興味ある課題である。今回、2003年秋に福岡市教育委員会によって実施された箱崎遺跡41次調査出土の中世人骨を精査する機会に恵まれたので、以下に明らかになった諸点を述べていきたい。

#### 資料・方法

箱崎遺跡は福岡市東区、多々良川河口左岸の博多湾に面した南北に延びる砂丘上に所在し、本調査区はその北東端に位置する。12世紀後半から人骨を伴う3基の墓が出土し、中でもSK-63木棺墓は龍泉窯系青磁碗、皿、刀子を副葬していた。本遺跡から出土した人骨は、全身の大部分の部位が確認されたものの骨の保存状態は不良であり、四肢骨については、一部をのぞいてほとんどの部位は計測、観察に耐えられなかった。計測はMartin-Saller(1957)に従い、性判定には中橋(1988)の方法を援用した。

#### 1. SK-34人骨

出土状態：頭位を北にした、仰臥屈肢の埋葬位で検出された。頭蓋骨は頭頂を上に、顔面を南西に向け下頬骨と関節した状態である。左手部は右前腕骨遠位端の上から、右手部は左肩部から出土しており、仰臥した胸の上で右手を下にして両前腕を交差させていたものと考えられる。下肢は膝で強屈して左に倒している。

保存状態：ほぼ全身の骨が揃っているものの、人骨自体の保存状態は悪く、軸幹骨に関してはそのほとんどが破片である。頭蓋では特に顔面の保存が悪く、鼻根部と眼窩上部、そして右顔面全体を欠いている。残存歯牙は以下の通りである。

M <sup>3</sup>	M <sup>2</sup>	×	×	P <sup>1</sup>	C	P	P		I <sup>1</sup>	I <sup>2</sup>	○	P <sup>1</sup>	P <sup>2</sup>	M <sup>1</sup>	M <sup>2</sup>	M <sup>3</sup>
M <sub>3</sub>	M <sub>2</sub>	M <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>1</sub>	C	I <sub>2</sub>	I <sub>1</sub>		I <sub>1</sub>	I <sub>2</sub>	C	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	M <sub>1</sub>	M <sub>2</sub>	M <sub>3</sub>

(○歯槽開放 ×歯槽閉鎖)

性別・年齢：外後頭隆起、眉弓、乳様突起の発達は共に弱い。また、前頭結節の発達が良く、側面での屈曲が目立つ。肩甲骨の関節窩（関節窩長33mm、関節窓幅24mm）が比較的小さく、上腕骨（骨体最小周56mm）と大腿骨（骨体中央周84mm）の骨体はやや細い。以上の所見から、本人骨は女性と見なされる。また、上・下顎の中、側切歯と犬歯の咬耗度は橋原（1957）の1b～2a、第1、2小臼歯は1c～2a、第1、2大臼歯は2a～2b、第3大臼歯は1b～1cである。前頭・矢状・ラムダ縫合の外板はすべて残存しているが、内板は観察することができなかつた。以上の所見から熟年と推定される。

## 2. SK-35 人骨

出土状況：体軸をほぼ北に向けた、右側臥屈葬の状態で検出された。頭蓋骨は左側面を上に、顔面を北西に向けている。左右上腕骨はほぼ体側に沿っており、右上肢は肘関節で強屈して手を胸に引き寄せているが、左前腕の状態は不明である。右下肢は強屈した膝を胸に引き寄せているが、左下肢は足骨が左大腿骨の骨体中央部より南西へおよそ 20 cm から出土していることから、股関節、膝関節とともにやや緩やかに屈曲していたものと考えられる。

保存状態：頭蓋冠は比較的保存良好だが、顔面では特に左顎面骨の大部分を欠いている。四肢骨は、右上腕骨、右大腿骨、右脛骨などの骨体部はほぼ遺存しているが、その他の四肢骨と軸幹骨は大部分が破片である。残存歯牙は以下の通りである。

/	M <sup>2</sup>	M <sup>1</sup>	P <sup>2</sup>	P <sup>1</sup>	C	I <sup>2</sup>	I <sup>1</sup>	I <sup>1</sup>	I <sup>2</sup>	/	/	/	M <sup>1</sup>	M <sup>2</sup>	/
/	M <sub>2</sub>	M <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>1</sub>	C	I <sub>2</sub>	/	/	I <sub>2</sub>	C	P <sub>1</sub>	/	M <sub>1</sub>	M <sub>2</sub>	/

(/欠損、・遊離歯)

性別・年齢：眉弓、特に眉間部が強く膨隆し、外後頭隆起の発達も良好である。乳様突起は大きい。大腿骨は粗腺の発達が弱く骨体もそれほど太くはない（骨体中央周 85 mm）、上腕骨（最小周 63 mm）と脛骨（栄養孔位周 93 mm）はかなり太い。以上の所見から、本人骨は男性の可能性が高いと考えられる。また、咬耗度は、上顎の第 1 切歯は橋原の 2a、下顎犬歯は 2b、上・下顎の第 1・2 大臼歯は 1c～2b である。冠状縫合の外板は消失しており、矢状縫合、ラムダ縫合はともにその半分ほどが消失している。内板については観察できなかった。以上の所見から、年齢は熟年と推定される。

## 3. SK-63 人骨

出土状況：頭位を北西に向けた右側臥屈葬位で検出された。頭蓋骨は左側頭部を上に顔面を南西に向け、下顎骨と関節した状態である。上肢は左右ともほぼ体側に沿わせて伸ばし、その手を左大腿骨の下に潜り込ませている。下肢は股関節、膝関節とも強屈している。

保存状態：頭蓋骨は比較的保存状態が良好だが、顔面下部、頭蓋底を欠いている。下顎骨は、右下顎角や切歯付近の歯槽弓などを欠いている。四肢骨はほぼすべての骨体が残されているが、軸幹骨のほとんどは破片である。残存歯牙は以下の通りである。

/	/	M <sup>1</sup>	/	/	C	/	/	O	△	O	O	/	/	/	/
M <sub>3</sub>	O	×	O	P <sub>1</sub>	O	/	/	I <sub>1</sub>	/	O	P <sub>1</sub>	△	M <sub>1</sub>	M <sub>2</sub>	M <sub>3</sub>

(△歯根のみ)

性別・年齢：眉弓が発達しており、乳様突起は大きく、外後頭隆起も比較的大きい。前頭結節の発達は弱く、前頭骨の側面觀はなだらかに傾斜している。三角筋粗面、粗線、殿筋粗面、ヒラメ筋線の発達が良く、上腕骨（骨体最小周 62 mm）、大腿骨（骨体中央周 88 mm）、脛骨（栄養孔位周 93 mm）の骨体がかなり太い。以上の所見から、本人骨は男性と判定される。また、歯の咬耗度は、下顎切歯は橋原の 2b、上顎犬歯は 3、下顎第 1 小臼歯は 2b～3、第 1、2、3 大臼歯は 2b～3 である。前頭縫

合の外板は残存し、矢状縫合の外板は中央部のみ消失、ラムダ縫合の外板はラムダから左へ5cmほどのみが消失している。内板については観察できなかった。以上の所見から、年齢は熟年と推定される。

### 形質

冒頭において中世人の形質として強い長頭性・低顎傾向・歯槽性突頭を挙げたが、本人骨にもこのような特徴が強く表れている（表1、2）。長頭性については、SK-34（熟年女性）は長頭に近い中頭SK-63（熟年男性）は過長頭に分類され、SK-35（熟年男性）も、土圧による変形によって頭蓋最大幅は計測できなかったものの、頭蓋最大長は195mmと長い。低顎傾向についてはSK-34の顎面は計測できなかったが、SK-63は上顎高が69mmと比較群中で最も低く、眼窩は低眼窓。鼻型は過広鼻に属す。しかし、SK-35は上顎高が73mmで、特に高顎傾向が強い北部九州弥生人には及ばないものの、それほど低くなく、眼窓は低眼窓に近い中眼窓。鼻型は中鼻に近い狭鼻に属する。歯槽性突頭については、唯一計測可能であったSK-35の歯槽側面角は過突頭に近い突頭に属する。

### 総括

2003年度に博多近郊の箱崎第41次調査によって3体の12世紀後半の人骨が出土した。埋葬姿勢は、頭位を北にした仰臥屈肢（SK-34）、頭位を北にした右側臥屈葬（SK-35）、頭位を北西にした右側臥屈葬（SK-63）が確認された。博多から出土している古代～中世人骨の埋葬姿勢は、頭位、姿勢共に多種に渡るが、この時代より後世のものには側臥位が多い傾向も見られ（中橋、1995）、今回の出土例もそれを追認させるものであった。当地における葬送儀礼の時代変化の一端を窺わせるものとして、今後とも注目していただきたい。

また、中世人骨は強度の長頭性や低顎傾向、あるいは強い歯槽性突頭という、一種独特の形態的特徴をもつことが、関東地方の材木座遺跡や山口地方の吉母浜遺跡など、各地の資料によって明らかにされている。ただその一方で、そうした時代性には多少の地域差がある可能性も示されており（中橋、永井、1985）、今後は各地の中世人資料を充実させる中でその具体的な描出、要因の解明が課題になろう。これまで博多旧街区から出土した幾例かの中世人骨にも概ね類似の時代性が指摘されてきたが、今回出土した当遺跡の中世人もまたそうした傾向を確認させるものであり、少なくとも博多を中心とした玄界灘沿岸地域の人々もまた、他地域と共に持つ可能性が強まっていると言えよう。ただ、その地域性の有無、差異の内容を明らかにするには一層の資料充実を図る必要があり、今後とも、こうした各地域の中世人骨を追加していくことによって、その特異とでも言うべき時代性が生み出された要因を明らかにする道が開けるものと期待する。

### 文献

- 原田忠昭（1954）：「現代西南日本人頭骨の人類学的研究」、人類研究1。
- Martin-Saller（1957）：Lehrbuch der Anthropologie, Bd. I, Gustav Fischer Verlag Stuttgart.
- 中橋孝博（1987）：「福岡市天福寺出土の江戸時代人頭骨」、人類学雑誌95。
- 中橋孝博（1988）：「古人骨の性別判定法」、日本民族・文化の生成（永井昌文教授退官記念論文集）、六興出版。
- 中橋孝博（1995）：「博多遺跡群第62次調査出土の古代・中世人骨」、博多48、福岡市教育委員会。
- 中橋孝博・永井昌文（1985）：「山口県吉母浜遺跡出土人頭骨」、吉母浜遺跡、下関市教育委員会。
- 中橋孝博・永井昌文（1989）：「1. 形質」、弥生文化の研究1、雄山閣出版。
- 柳原博（1957）：「日本人歯牙咬耗に関する研究」、熊本医学会雑誌31（補冊4）。

表1. 頭蓋計測値の比較（男性）

Martin No.	霧峰41次(中世)		吉母浜 <sup>1)</sup> (中世)		北部九州 <sup>2)</sup> (弥生)		天福寺 <sup>3)</sup> (近世)		西南日本 <sup>4)</sup> (現代)	
	SK-35	SK-63	n	M	n	M	n	M	n	M
1 頭蓋最大長	195	196	16	181.8	118	183.7	38	182.6	108	181.4
8 頭蓋最大幅	-	130	17	136.2	117	142.4	38	138.6	108	139.3
17 Ba-Br高	-	137	17	139.4	101	137.7	33	139.2	108	139.3
8:1 頭蓋長幅示数	-	66.3	16	74.9	104	77.7	37	76.0	108	76.6
17:1 頭長高示数	-	69.9	16	76.8	91	75.3	33	76.2	108	76.9
17:8 頭幅高示数	-	105.4	17	102.5	91	97.0	33	100.8	108	100.1
48 上頸高	73	69	15	69.9	114	74.8	18	74.5	92	71.8
51 眼窩幅(左)	42*	43*	18	42.0	89	43.2	24	42.6	108	43.0
52 眼窩高(左)	32*	31*	18	34.4	93	34.5	24	34.1	103	34.4
52:51 眼窩示数(左)	76.2*	72.1*	18	82.1	86	79.9	23	80.9	108	80.2
54 鼻幅	24	29	17	26.0	117	27.1	24	26.5	108	25.9
55 鼻高	52	50	16	51.4	116	52.8	24	52.9	108	52.2
54:55 鼻示数	46.2	58.0	16	50.5	113	51.4	24	50.1	108	49.8
72 全顎面角	83	-	15	82.5	85	84.5	16	83.2	92	83.8
74 脊槽側面角	70	-	14	65.2	83	69.8	16	67.0	107	70.7

1)中橋・永井(1985)、2)中橋(1969)、3)中橋(1987)、4)原田(1954)。\*右を使用

表2. 頭蓋計測値の比較（女性）

Martin No.	霧峰41次(中世)		吉母浜(中世)		北部九州(弥生)		天福寺(近世)		西南日本(現代)	
	SK-34	n	M	n	M	n	M	n	M	
1 頭蓋最大長	180	26	176.4	86	177.0	38	174.7	57	172.8	
8 頭蓋最大幅	137	26	132.0	84	138.4	38	133.5	57	134.0	
17 Ba-Br高	121	25	133.0	66	130.7	35	132.7	57	131.3	
8:1 頭蓋長幅示数	76.1	26	74.9	72	78.1	38	76.5	57	77.6	
17:1 頭長高示数	67.2	25	75.4	62	74.1	35	76.1	57	76.0	
17:8 頭幅高示数	88.3	25	100.7	56	94.9	35	99.4	57	98.0	
65 下顎関節突起幅	122	28	118.0	34	126.8	-	-	-	-	-
66 下顎角幅	104	28	95.9	26	100.4	-	-	36	88.8	
68 下顎骨長	73	28	71.9	26	72.5	-	-	-	-	-
68 (1)下顎骨長	108	28	100.1	-	-	-	-	-	-	-
69 (3)下顎体厚(左)	13	27	12.2	-	-	-	-	-	-	-
70 下顎枝高(左)	58	23	56.1	20	59.2	-	-	36	57.7	
70a 下顎頭高(左)	54	25	51.0	-	-	-	-	-	-	-
71 下顎枝幅(左)	38	28	34.7	34	35.3	-	-	36	31.4	
71:70 下顎枝示数(左)	65.5	23	62.1	20	61.0	-	-	36	54.7	
79 下顎枝角	125	26	121.5	34	125.2	-	-	-	-	-

## 付論 2

### 箱崎 41 次調査出土動物遺存体について

大規模事業等担当 屋山 洋

箱崎遺跡は博多湾に面した砂丘状に位置する遺跡で中近世には箱崎宮を中心として栄えた遺跡である。41次調査区は遺跡の東端に位置し、調査区東側の段落らに堆積した包含層から動物遺存体が出土した。包含層中の遺物は12世紀中頃～後半までを含んでおり、包含層の上から12世紀後半の墓が掘込むため時期は12世紀後半を下限とする。骨は哺乳類の四肢骨を主とするがイヌやネズミの咬痕が多くみられ、廻棄後すぐに埋まらなかつたためか骨の遺存状態は悪い。ヒトの骨が数点出土しているが中世墓から遊離したものと思われる。調査時に土壤の水洗選別等は行っていない。

イヌ 5点出土した。このうち頭椎は椎体の後側が刃物により切断されており、解体時に首を切断した痕跡と考えられる。その他の骨に解体痕は確認できなかった。

イノシシ 断定できたのは頭蓋骨と下顎、上顎歯の3点のみである。上顎歯は左側第3後臼歯で摩滅が始まっているが、下顎は第4前臼歯に乳歯が残った幼獣で別個体であり、最小個体数は2匹である。

イルカ類 頭蓋骨と下顎が出土した。出土時の観察では頭蓋骨・下顎ともまとまっていたと考えられるが、遺存状態は悪く取り上げ後扁平化している。頭蓋骨嘴部上面に薄く削るような刃物痕が観察できる。皮を剥ぐ時につけた痕跡か。歯は顎から分離して一本のみ出土しており、長さ1.99cm、径6.8mmを測る。頭蓋骨は全長60cmで上下顎とも歯が密に並ぶ、小型のイルカである。箱崎遺跡の南西側に位置する博多遺跡で出土するイルカ・クジラ類の骨のほとんどは解体痕を持つ椎骨であるが、その他に少数の頭蓋骨が土壤の底層から出土する。今回も完形で下顎を伴うことや椎骨が出土していないことからこの調査区近辺で解体・廻棄されたのではなく、よそから持ち込んで土坑に埋置した可能性が考えられる。

クジラ類 椎骨の棘突起先端部分のみが出土した。大型のクジラ類と思われる。椎体部との切断はナタ状の刃物を使用せず、椎体との境を削って薄くした後へし折っている。

ウシ 断定できるものは19点で頭蓋骨片と下顎の他、中手・中足骨と指骨など四肢先端部である。椎骨、肋骨片も出土しているがウマと区別することができなかった。下顎骨は3点出土したうち2点は右側でこれらは乳歯が残っていることなどから幼獣～若獣であるが上顎歯は咬耗著しく歯冠も2～3mmしか残っていないため若獣と考えられ最小個体数は若獣2頭、老獣が1頭を数える。

ウマ 同定できた分は39点で頭蓋骨と下顎の他肩胛骨以下の四肢骨であるが、四肢骨では指骨や距骨など骨格器として利用しにくい先端部分が多く出土する。大転骨、指骨に解体時につけたと思われるカットマークがみられるが、指骨まで解体痕が付くのは偽鱈甲などとして足の蹄を利用した可能性が考えられる。ウシと出土部位が似ているのは、利用法が同じであったためか。

シカ 10点出土した。頭蓋骨と四肢骨で上腕骨遠位端と大脛骨にこまかにカットマーク、蹠骨前面内側にナタ状の解体痕があり、肉が少ない先端はナタ状の大きな刃物で切断し、肉が多く付く上腕骨や大脛骨は丁寧に解体したことが判る。頭蓋骨はオスの左右前頭骨で同一個体の可能性があり角座下に角を切り離した時のナタ状痕跡がみられる。

まとめ 出土した動物の割合はイヌ4%、イノシシ3%、シカ8.5%、ウシ16%、ウマ33%、イルカ・クジラ類2.5%となり、イノシシ・シカ・イルカ類が多い博多遺跡群とは異なる。またウシ・ウマの区別が付かなかつた骨を加えるとイノシシ・シカの中型哺乳類が16%、ウシ・ウマの大型哺乳類が60%と大型哺乳類の割合が多い。これは土壤洗浄を行つてないため目に付きやすい大型の骨が多いこともあると思われ、他に時期差や集落端である本調査区が日常にでる魚等の塵とは異なる物の廻棄場所であった可能性なども考えられる。解体痕はイノシシ・シカの椎骨でカットマークを確認できた他、ウシ・ウマでも数は少ないがカットマークが観察でき、食料・骨格器材料として利用されていたことが判る。イルカ・クジラ類の椎骨はほとんどがナタ状の刃物で叩き折られるが今回出土したクジラの棘突起は骨を薄く削ってからへし折っており、何らか別の利用法があるものと考えられる。



## IV. 第44次調査

### 1. 調査に至る経過

平成15年2月28日、児嶋邦男氏より福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課へ共同住宅建設に伴う福岡市東区箱崎1丁目35-3地内における埋蔵文化財の事前審査について依頼がなされた。これを受けた埋蔵文化財課では事業計画地が周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡に含まれることから試掘調査が必要であるとの判断がなされた。同年3月3日、試掘調査を行い、その結果、柱穴等の遺構が検出された。この成果をもとに協議を重ねたが現状での設計変更は不可能との判断から記録保存のための発掘調査を行うこととなった。児嶋邦男氏と福岡市の間で埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、調査は平成16年2月16日より開始、平成16年3月15日に終了した。

最後になりましたが、児嶋邦男氏をはじめ関係者の方々には調査に際し、多大なご理解とご協力を頂いた。記して感謝いたします。

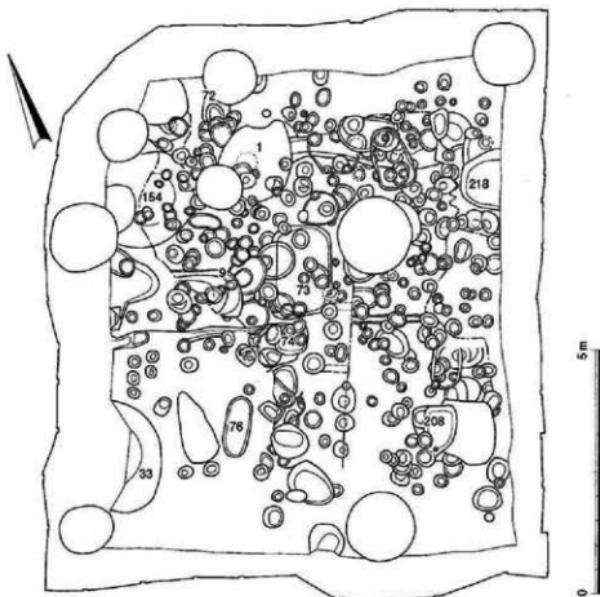
### 2. 調査体制

調査主体 福岡市教育委員会

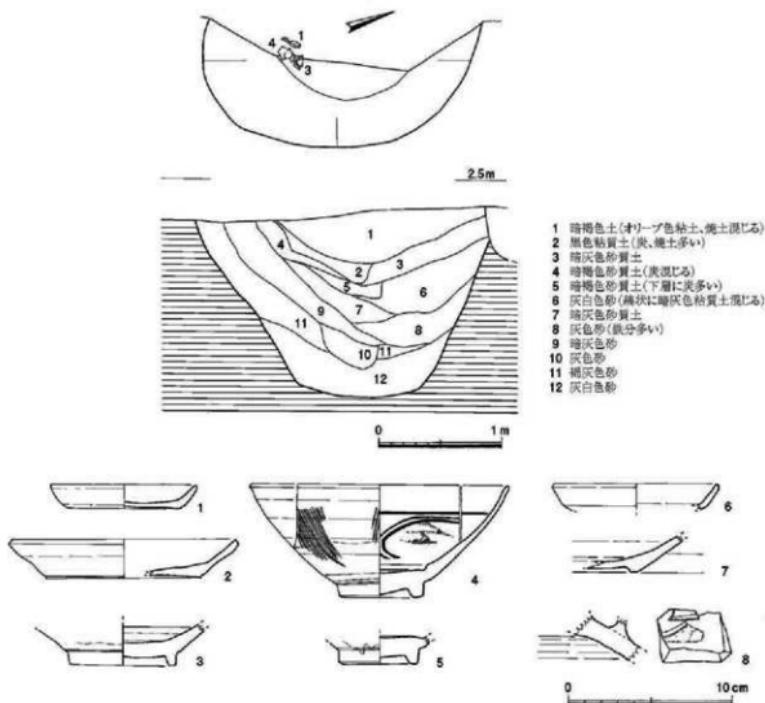
調査総括	文化財部長	山崎純男
	埋蔵文化財課長	山口謙治 山崎純男（前任）
	調査第2係長	池崎謙二 田中寿夫（前任）
事前審査	事前審査係長	浜石哲也 池崎謙二（前任）
	主任文化財主事	吉留秀敏 米倉秀紀（前任）
	事前審査係	久住猛夫
調査庶務	文化財整備課管理係	御手洗清
調査担当	調査第2係	中村啓太郎
調査員	上田龍児	
発掘作業	小川秀雄 徳永栄彦 吹春哲男 宮崎雅秀 竹原吉秋 花田昌代 野田トヨ子 井上ヨシ子 田中フキ子 光安晶子 大庭智子 村崎祐子 藤澤義一 園田豊 上田龍児 渡辺誠 田端名穂子 中村幸子 花田則子 安藤史郎 阿部純子 稻崎龍也 嶋村雄介 永松弘恵	
整理作業	林由紀子 下川奈津代 釜崎法子 原陽子 三栗野雅子	



第51図 第44次調査区位置図 (1/500)



第52図 遺構配置図 (1/100)



第53図 SE-33 実測図 (1/40) より出土遺物実測図 (1/3)

### 3. 調査概要

第44次調査区は東区箱崎1丁目35-3に所在し、遺跡の中央西側斜面に位置する。調査は矢板打ち、重機による鋤取り後、人力掘削から開始した。廃土処理の関係から調査区を東西に2分割し、西側から順に調査を行った。また安全対策から矢板から1m程は残した。

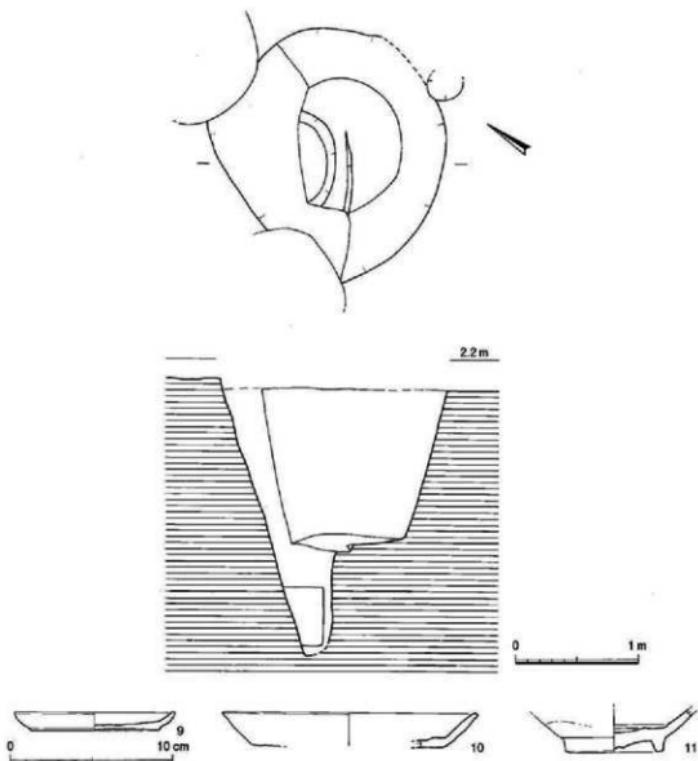
遺構は整地層上面と地山である黄褐色砂の2面で検出したが、第2面検出の遺構には第1面で検出できなかった遺構を多く含む。このため掲載した遺構配置図は1面、2面を合成したものである。整地層上面で標高2.7m～3.1mを測る。検出した遺構は井戸2基、土坑、柱穴等である。調査面積は114 m<sup>2</sup>を測る。

### 4. 調査の記録

#### 1) 井戸

##### SE-33 (第53図)

調査区南西に位置し、調査区外に抜がる。掘り方は円形を呈すると思われる。南北方向で幅230



第54図 SE-154 実測図 (1/40) よび出土遺物実測図 (1/3)

cmを測る。井筒は確認できなかった。

出土遺物（第53図）1は土師器の小皿。口径9.4cm、器高1.5cmを測る。底部は糸切りで板状圧痕を有する。2は土師器壺。復元口径14.2cm、器高2.4cmを測る。底部は糸切り。3は白磁碗VII類。4・5は同安窯系青磁碗。6は龍泉窯系青磁皿。7・8は陶器。

#### SE-154（第54図）

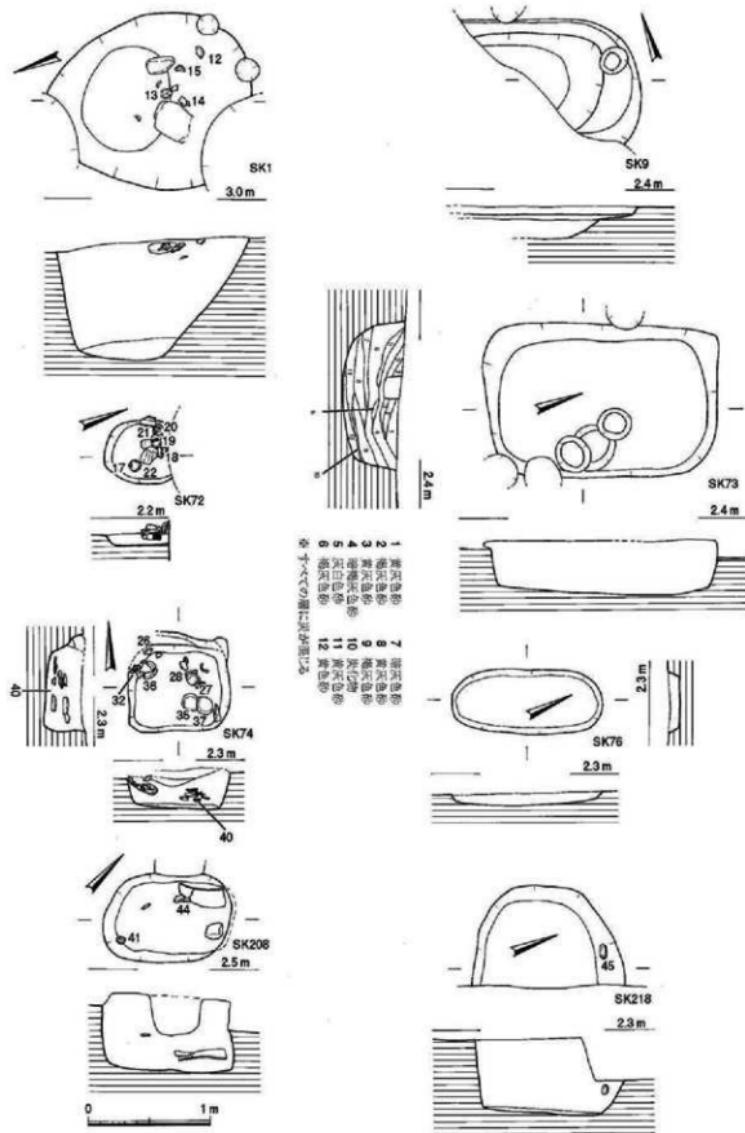
調査区南西に位置し、調査区外に拡がる。掘り方は円形を呈すると思われる。東西方向で幅200cmを測る。中位に平坦面をつくり、さらに一段深く円形に深さ90cm程掘削する。井筒は木桶か。

出土遺物（第54図）9は土師器の小皿。復元口径9.8cm、器高1.1cmを測る。底部は糸切りで板状圧痕を有する。10は土師器の壺。復元口径15.6cm、器高2.1cmを測る。11は白磁碗VII類。

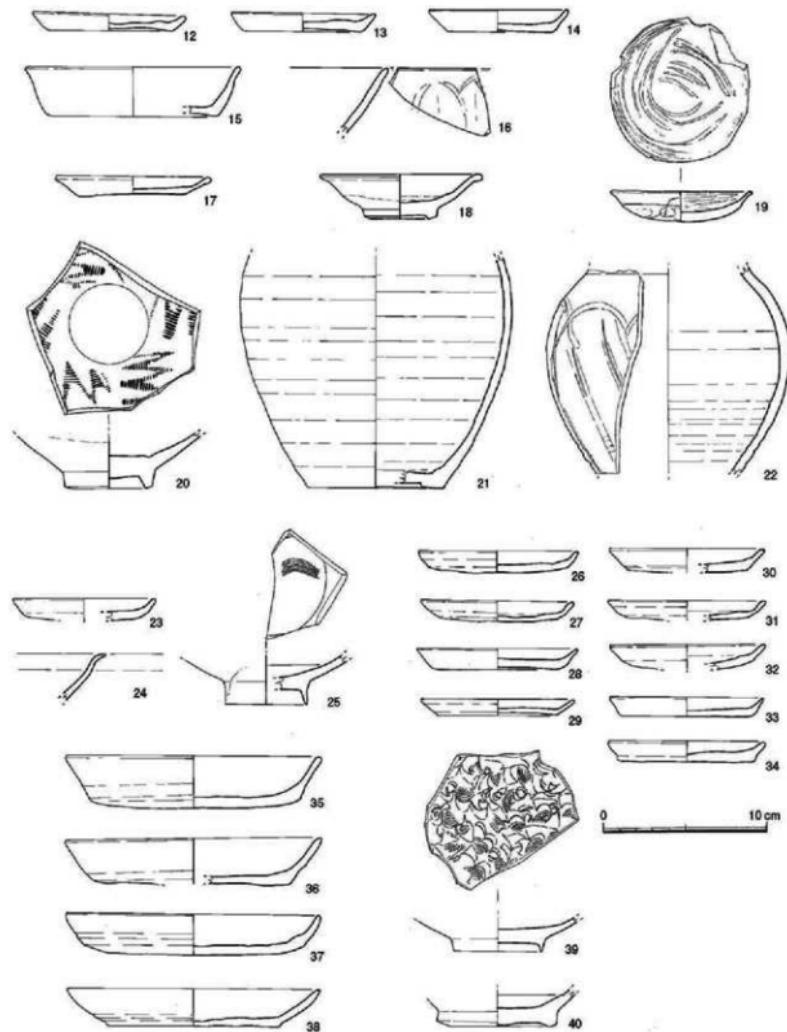
#### 2) 土坑

##### SK-1（第55図）

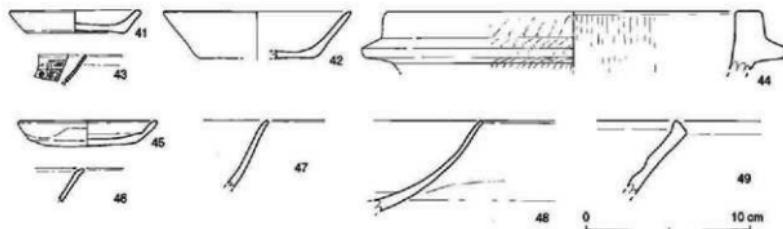
調査区北に位置する。梢円形を呈し、長さ155cm、幅145cm、深さ97cmを測る。



第55図 SK-1・9・72・73・74・76・208・218実測図 (1/40)



第56図 SK-1・72・73・74出土実測図(1/3)



第57図 SK-208・218出土遺物実測図(1/3)

出土遺物(第56図)12~14は土師器の小皿。口径8.5cm~9.4cm、器高1.1cm~1.3cmを測る。底部は糸切り。15は土師器の壺。復元口径13.4cm、器高3.1cmを測る。底部は糸切り。16は龍泉窯系青磁碗Ⅱ類。

#### SK-9(第55図)

調査区西に位置する。梢円形を呈し、幅95cm前後、深さ18cmを測る。遺物は土師器、白磁の細片が出土している。

#### SK-72(第55図)

調査区北に位置する。北側を先行して行われた杭打ちによって切られる。梢円形を呈し、幅52cm、深さ10cmを測る。

出土遺物(第56図)17は土師器の小皿。口径9.6cm、器高1.2cmを測る。底部はヘラ切りで板状圧痕を有する。18は白磁皿Ⅲ類。19は瓦器の小皿。口径8.6cm、器高1.9cmを測る。調整は外面はヨコナデ、内面はヘラミガキを施す。20は同安窯系青磁碗。21・22は陶器の壺。釉は21がオリーブ褐色、22が暗オリーブ色を呈する。

#### SK-73(第55図)

調査区中央に位置する。隅丸長方形を呈し、長さ190cm、幅122cm、深さ43cmを測る。

出土遺物(第56図)23は土師器の小皿。復元口径8.8cmを測る。底部はヘラ切り。24・25は白磁碗。

#### SK-74(第55図)

SK-73の南に位置する。隅丸方形を呈し、南北85cm、東西75cm、深さ33cmを測る。

出土遺物(第56図)26~34は土師器の小皿。口径9.4cm~10.0cm、器高1.0cm~1.5cmを測る。底部は26~28・30~32・34がヘラ切りでこの内26・27・31・34は板状圧痕を有する。他は糸切り。35~38は土師器壺。口径15.6cm~16.0cm、器高2.3cm~3.3cmを測る。底部は38が糸切りで他はヘラ切り。いずれも板状圧痕を有する。39は青白磁。40は白磁碗Ⅳ類。

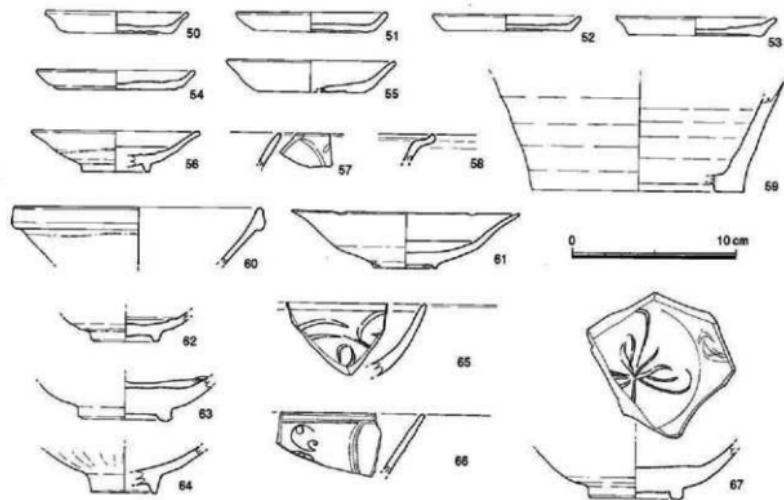
#### SK-76(第55図)

調査区南西に位置する。梢円形を呈し、長さ124cm、幅50cm、深さ9cmを測る。遺物は土師器の細片が出土している。

#### SK-208(第55図)

調査区南東に位置する。不整梢円形を呈し、長さ103cm、幅72cm、深さ62cmを測る。

出土遺物(第57図)41は土師器の小皿。口径8.1cm、器高1.4cmを測る。底部は糸切り。42は土師器壺。復元口径11.4cm、器高2.9cmを測る。底部は糸切り。43は白磁X類。44は石鍋。



第58図 整地層及びその他の出土遺物実測図 (1/3)

#### SK-218 (第55図)

調査区北東に位置し東側が調査区外に延びる。幅120cm、深さ64cmを測る。

出土遺物(第57図)45は瓦器の小皿。口径8.6cm、器高1.6cmを測る。底部は糸切り。46は白磁IX類。47は青磁碗。48は白磁碗。49は須恵質の鉢。

#### 3) 他の出土遺物(第58図)

50～59は整地層掘り下げ時の出土遺物。60～67は第1面検出時の出土遺物。第1面検出面は整地層上層。50～55は土師器の小皿。口径8.8cm～10.4cm、器高1.0cm～1.9cmを測る。底部は53がヘラ切り。他は糸切りで板状圧痕を有する。56は白磁皿III類。57・58は龍泉窯系青磁。57は碗II類、58は坪皿類。59は陶器の壺か。釉は灰白色を呈する。60は白磁碗IV類。61は青磁皿。口縁部に輪花を有する。全面に施釉し、高台部に目跡が残る。62～67は龍泉窯系青磁碗。

## 5. 小結

今回の調査では井戸、土坑、柱穴等が2面で検出された。また第1面と第2面の間に焼土面及び焼土、炭化物を含む整地層が確認された。この層は遺跡の北西部を中心に広範囲に確認されている。これらについては最近、文永の役に起因する可能性が考えられているが、本調査においては遺構の密度が高く、整地層の出土遺物のみを完全に分けることは出来ていない。また第2面検出の遺構には第1面で検出できなかったものが含まれるため、焼土面及び整地層の時期を確定することが出来なかった。このためその可能性の指摘にとどめておきたい。

# 図 版





(1) 第39次調査北半区全景



(2) 第39次調査南半区全景

図版2



(1) SE-9 (北から)



(2) SE-50 (北から)



(3) SE-74 (南から)



(4) SE-92 (北西から)



(5) SK-40 (北から)



(6) SK-63 (南から)



(1) SK-69 (東から)



(2) SK-70 (北から)



(3) SK-73 (北から)



(4) SK-76 (東から)



(5) SK-80・81 (南から)



(6) SK-99 (東から)

図版4



(1) 第41次調査東半区全景



(2) 第41次調査西半区全景



(1) SE-33 (東から)

(2) SE-64 (西から)



(3) SE-65 (南から)

(4) SE-66 (西から)



(5) SE-67 (西から)

(6) SE-68 (東から)

図版6



(1) SE-155 (南から)



(2) SE-156 (南から)



(3) SE-157・208 (西から)



(4) SE-169 (南から)



(5) SE-171 (北から)



(6) SE-172 (北から)



(1) SK-34 (西から)



(2) SK-34 (東から)

図版8



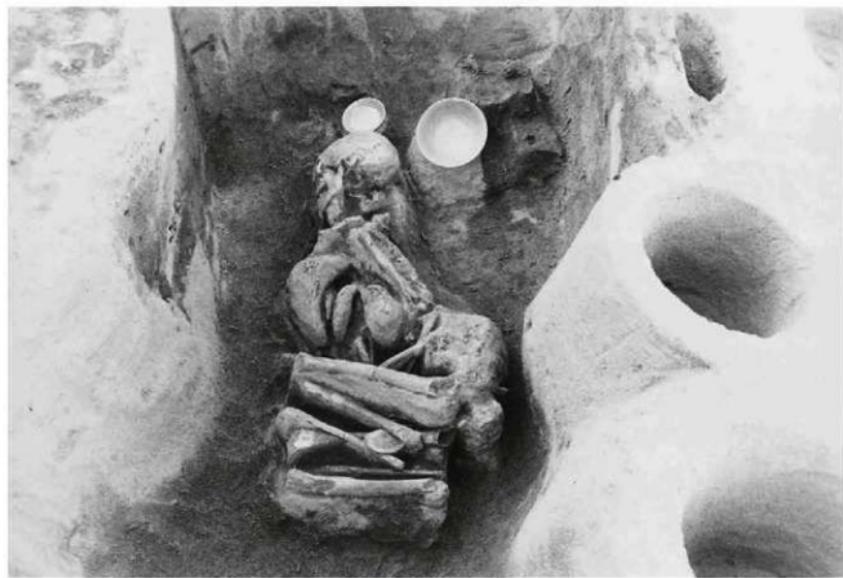
(1) SK-35 (西から)



(2) SK-35 (東から)



(1) SK-63 (西から)

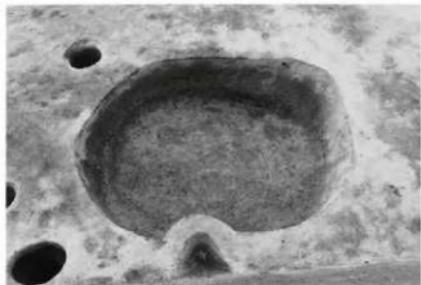


(2) SK-63 (南から)

## 図版 10



(1) SK-30 (西から)



(2) SK-18 (東から)



(3) 調査区東端部 (東から)



(4) 調査区北拡張部 (北から)



(1) 第44次調査西半区第1面



(2) 第44次調査西半区第2面

図版 12



(1) 第44次調査東半区第1面



(2) 第44次調査東半区第2面



(1) SE-33 (西から)



(2) SE-154 (北から)



(3) SK-1 (西から)



(4) SK-72 (東から)

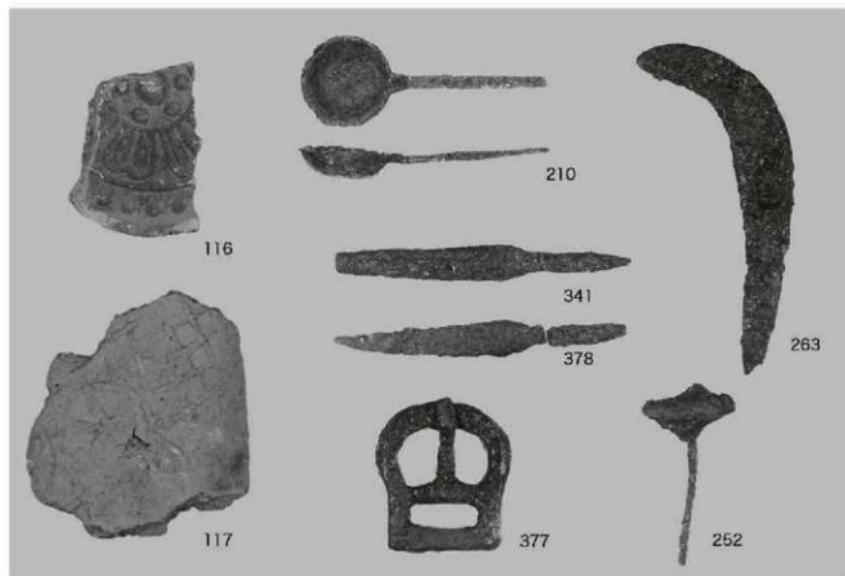


(5) SK-73 (東から)

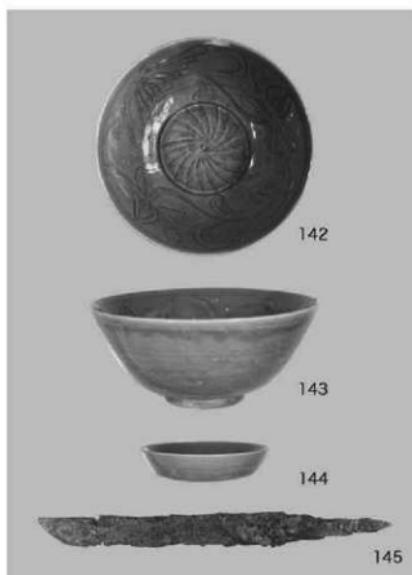


(6) SK-74 (南から)

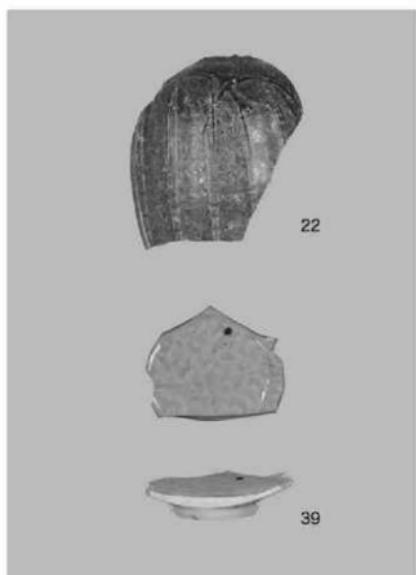
図版 14



(1) 第39次調査出土遺物



(2) 第41次調査出土遺物



(3) 第44次調査出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	はこざき
書名	箱崎 24
副書名	箱崎遺跡第39・41・44次調査報告
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第854集
編著者名	中村啓太郎
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号
発行年月日	2005年3月31日

所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号					
箱崎遺跡39次	福岡市東区 箱崎 1-2031 他	401301	0116	33° 36' 41"	130° 25' 47"	20030410 ～ 20030509	149	共同住宅建設
箱崎遺跡41次	福岡市東区 箱崎 3-2426 他	401301	0116	33° 36' 57"	130° 25' 40"	20030916 ～ 20031211	1000	共同住宅建設
箱崎遺跡44次	福岡市東区 箱崎 1-35-3	401301	0116	33° 36' 50"	130° 25' 29"	20040216 ～ 20040315	114	共同住宅建設

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
箱崎遺跡39次	集落	中世	井戸 土坑 溝	土器 陶磁器 瓦 石製品	
箱崎遺跡41次	集落	中世	井戸 土坑 溝 埋葬遺構	土器 陶磁器 瓦 石製品	
箱崎遺跡44次	集落	中世	井戸 土坑	土器 陶磁器 石製品	

## 箱崎 24

—箱崎遺跡第39・41・44次調査報告—  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第854集

2005年(平成17年)3月31日  
発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1-8-1  
印刷 川本印刷株式会社  
福岡市博多区駅南5-6-18

